始

北驥

書肆 益愛堂 版

大正
9.17
内交

新新珍柄物は
豐富に取揃置申候
社交に重大なる要素は
新新珍柄の御選擇にあり
顧客に對し不絶意氣を
珍柄の又提供する店は
八戸十三日町 泉 三萬呉服店
特設電話七十二番
振替口座東京八六二四番
卸賣は特に御相談相働き可申候
三萬卸部

特1
30

序

驥北の駿はいま奥南の天地に集つて來た。嘶く聲蹄の音が高く響きわたつた。

青森縣產馬共進會に、轡をならべた名馬の面影を四方に傳へるのは今にして無用の業ではあるまいと、そのことを企てた。そしてなほ「驥尾に附す。」といふ語をそのまゝに、此機を利用して、土地風物を天下に紹介しようとも圖つた。そして匆忙の間に、此小册子を得たのである。不備はなほ多いこととも思ふがこれが多少でも地方紹介の一助ともなるならば、たゞに編者の幸ひのみではない。

「八戸小記」は戀川なぎさ、卷尾の俗謠は梅彥、菊之助、三氏の手でなつた。寫眞はわが寫眞部の撮影になつたものである。

大正六年八月　　編者識

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第十七回青森縣產馬共進會
八戸協贊會長　尾上貫次郎氏

第十七回青森縣產馬共進會
八戸協贊會副會長　奈須川光寶氏

八戸產馬畜產組合馬檢所

八戸產馬畜產組合事務所

前八戸產馬組合長　淺水禮次郎氏

八戸產馬組合副組長　出町　甫氏

南部の馬

東北本線の鐵道の上を、上野を出て青森に向つて駛る汽車がはるばると福島から宮城、宮城から岩手にはひつて來るにしたがつて、窓外の景物が荒凉たる趣を示して來る。田圃と言はず山林といはず、都會といはず、すべての姿が、生みのまゝの態で擴がつてゐるのに氣がつく。そして旅するものゝ心の上に淡い旅愁を感せしめずは置かない。車が北上川の流と別るゝ頃からは、自然の色は別にも甚だしい變りやうをしてゐた。

その中にあつて、皆人が驚きの眼を持つて瞻つめるのは田疇の間に肥料を運ぶ馬であつた。驛落の間に荷を運ぶ馬であつた。駄馬から馬車馬から乘馬から、すべての雄々しい姿であつた。廣漠とした草野の中に嘶く駒の聲であつた。馬淵の流に添うて青森縣にはひると、長谷の高山が右窓に聳えてゐた。その昔宇治川の流をみだした名馬生嬉磨墨は、この山の裾野住谷の牧の產といはれた。左の窓からは、異國馬春砂の碑のある元木平の松の並木の翠も望まれた。

糠部の駒とよばれたこゝの牧場からつゞいての馬淵川の流域は、奥の荒牧とよばれてあつた。馬淵の流を越えてからは渺茫とした三本木の野となり、尾駮の牧のさきざきまで、太平洋の波を吹く蟠りのない風のなびく幾十里の野は、すべてこの馬の姿を見せつゞけた。この中に千里の駒

もあらう。驥北の駿もあらう。さう思ひながら、誰もが「東北」といふ問題を、この斧鑿のいれられぬ自然の姿の前に考ひしながら過ぎて行くのだつた。

「黄金花さく」陸奥は黄金を產することゝ良馬を產することゝでだけ世に知られた。

「馬はこれ南部の逸物」。ときつと呼ばれた南部の馬は、自然に生れたものではなかつた。馬を祀つた神である蒼前の社は、東北にはひつて始めてあつた。南部へはひつて多かつた。

蒼前の社の名高いものは木下の氣比神社であつた。陰曆六月の一日と十五日は其緣日だつた。其日は南部三郡の馬は綺羅を飾つて神の前に曳かれた。鼻掛・掛腹卷・胴締に飾りたてられた馬の鈴は高く鳴りひゞいた。家の紋所が日に輝いた。鬣をふるはして駒は勇んだ。そして良馬を得ることを神に願つたのだつた。繪馬は數限りもなく納められた。あやかるやうにと願つてはその繪馬を借りても來た。八戸からは東海岸道を通つて行つた。あとからあとからとつゞくこの勇ましい姿が、南部の馬を產み出す本でもあつた。

蒼前平には蒼前の社があつた。小笠原宗前といふ馬術の名人を祠つたものと傳へられた。こゝにも馬を引いては詣でた。

櫛引の蒼前も名高かつた。櫛引河内の愛馬が斃れたあと、神となつて馬を濟はうとしたのだと傳へられた。そこの社の高麗犬の臺石に「牛馬安全」と彫られてゐるのも珍らしかつた。其處では木の枝一つ草一本子供等までが手を觸れなかつた。馬が病んだり死んだりすることが、目前に迫るやうに信ぜられてあつた。かうしたことも良馬を得るの本であつた。

根城の馬場の流鏑馬も名高かつた。八幡の流鏑馬には岩手の遠野から騎手が乘りつけて來た。そして矢を放つては宿ることなしに歸つて行つた。「遠野の乘流し」といつて名高かつた。

八幡で賣る玩具の馬も名高かつた。三春の駒とならんで世にきこえた。子供等の頭の中に、心の中に、かうしたことから馬といふ觀念が栽ゑられて行くのでもあるやうだつた。

さうした自然が齎らしたことの外には、土地の自然がこれが因をなしてゐた。馬淵川とその夫婦川と呼ばれた新井田川との二つの川が、おもむろに流れ下つて海に注ぐ流域の沃野が牧畜に好適してゐるのだつた。水は多かつた草は豐かだつた。この自然が八戸藩主南部信房を誘ふて產馬の事業を起さしたのだつた。寛文の頃住谷の牧がひらかれた。そして良馬をつくり出すことにつとめられるやうになつた。馬術に長じた信房は自ら其師範にさへあたつた。それから代々上下とも藩の事業としてこれを勵んだので「軍馬としては南部の馬でなければ役立たぬやうにされた。享保の頃には廣信が諸國に販路をひらいたので

地方の一大事業とさるゝに至つた。今からすれば二百六七十年の昔からつぎつぎに手を加へて育くまれたそれであつた。

藩は廢されて縣となつたが、政令はそのまゝ襲用し、種馬貨下げや糶駒市場や歩金徵收を令達して、縣がこれをやつたが、斯のことは民業とすべきものであつて、これが發達の上から官でやるのはよくないと、その業務や財産を組合の惣代人に還附することにしたが、其時明治十四年の秋から南部三郡産馬維持共會と、分離との二派に分れて互に讓らない。十六年になつていよいよもつれにもつれた葛藤が法廷を煩はすことになつた。そこで十七年の四月、縣廳では南部三郡産馬取締規則及馬籍取締規則を布き、同年八月四日奈須川光寶淺水禮次郎の兩氏を八戸産馬組合の肝煎役に任ぜられ、始めて組合の仕事が民間に落ちた。二十二年二月に改正された取締規則で、肝煎役を組合長と改められたので、選擧の結果淺水禮次郎氏が同年四月に就職し、明治三十一年九月辭任するまで、その職に在り、三十一年の十一月に成田芳雄氏が組合長となつた。三十三年二月産牛馬組合法に據つて、縣の取締規則を改正し、組合の定款を議決して認可を乞ふことにした。其結果更に副組合長評議員を置くことになつて、三十四年九月白井毅一氏が副組合長に就いた。其年十二月成田組合長の死亡によつて白井氏が組合長の職を襲ふことになつた。爾來大正六年まで其職にあつたが辭任して、現在では副組合長出町甫馬渡又兵衛の兩氏と評議員とで事にあたつてゐる。

この組合で洋種牡馬を縣廳から借受けたのは明治十六年の匈加利亞種牡馬六頭が嚆矢で、二十年に佛國アルゼリー種牡馬五頭を買入れ、二十一年に斗南藩就産金で米國から購つた「シロシター」種牡牝馬七頭を借入れたり、馬匹の改良に百方力を竭したので、年一年と其實績を擧げることを得、目今では組合の所有や組合員の私有洋種牝馬の數が四百六頭あつた。それに明治四十三年十一月岩手縣九戸郡大野村に九百餘町歩の原野を購め放牧場として、當歳二歳附の牝馬の放牧を奬勵して、四肢の發育と馬格の健全を圖つて好結果を得てゐる。大正二年四月今までの事務所廐舍では狹隘でならぬので、現在のところに事務所馬見所廐舍馬繋所等を新築して八月にひき移つたのであつた。

これは八戸組合の秩序だてた經路だつた。そして南部の馬をこれからさきなほ天下に嘶かする中樞であるのだつた。

八戸小記

風は西から東へ吹くことが多かつた。東から西へ吹き返すことも多かつた。八戸の街は風に隨つて西から東へ伸びてゐた。東から西へ並んでゐた。街の西を劃つて風を防ぐための杉の木立が南へ並んでしばらく行くと、蟲々と見あぐるやうな杉の並木から、左右が蔽ひかぶさつて、綠の隧道をなしてゐる上り街道に出た。昔の旅する人達は此處に在る桝形で見送りの人々に別れて、笠の上に松風の調べを聽きながらはるばると上つて行つた。馬淵川と新井田川とに挾まれた丘陵の上を、新井田川の上流、是川鷹の巢川の左岸の稻甕の峠つゞきに、山の背から背を渡るやうに作られた街道の上を、驛路の鈴は鳴り響いて通つた。それから馬淵の流れを遡るやうに、峠はつゞき、並木の松はいよいよ古りて行つた。上り下りの鈴挾箱の殿樣の行列がこの街道に繪卷をひろげるやうに想ひ出された。この街道を八戸に文明ははひつて來たのであつた。二萬石の八戸の城は、西から流れた馬淵川が北をめぐつてから東へ流れていつた。西はこの街道の丘陵の襞から流れる白山川の水を湛えて溜池をつくつた。其頃は二本貫の柵のある總門のあつた總門町から、今はこの溜池の堤を渡つて縣道は入りこんでゐた。そして昔も今も西から東へ文明を通してゐるやうに、街筋は伸び伸びて行つた。

總門町――今の新荒町から、荒町、二十三日町、十三日町、三日町、八日町、十八日町、二十八日町、鹽町、下組町と、大通は可成長かつた。南裏の通は、二十三日町の背中合せな二十六日町から、逐次に、十六日町、六日町、朔日町、十一日町と裏表を合はせると九といふ數になつた。八戸のかを町。それを呼びなしてゐた。そのつぎに下大工町、柏崎新町が續いた。この縱な二條を主線にして、北には番町の通もあつたけれども、昔の士族町がそのまゝでゐる爲めに、線がすこし複雜した。稻荷町、本徒士町などは西に、馬場町は番町の北裏に更に並び、それが八幡町となつて街の中部を膨らした。城はそのふくらみにあるのだつた。さうした市區の井然とした姿は東北の街には珍らしいものにされてゐた。橫に交はつた線は、上り街道へ通る上組町に始まつて、上徒士町、町組町と三つは南にだけ折れ、町組町は糠塚へはひつて行つた。昔三店と呼ばれた酒屋の一つ大塚屋のところからの大塚屋橫町は、南で鳥屋部町、北で堤町となつた。堤町はもとの東海岸道で、馬淵川の最終に架けた町である大橋を五戸街道と一緒に渡つて、またすぐに左右に別れて行つた。右は下長苗代を通つて東海岸道といふ名で、左は上長苗代にかかつて五戸街道となつた。火の見櫓のあつた櫓橫町はこの海岸道の南へ碧く前を塞いで聳えた階上嶽を目あてに伸びる線で、寺橫町、大工町、鍛冶町を越えて吹上から更に久慈道を分けて進むところの橫の主線で、北は番町から城の壕に添うて停車場へ通つた。昔は制札前といつた河內屋といふ酒屋のところの辻から、南へ長橫町がのびて吹

上で久慈道に合し、北は城の大手を突ぬけるやうに停車場へ通つた。丸〻横町は南へぬけて本覺寺、來迎寺、願榮寺の間を蹈を越えて類家に入つた。次ぎには常海町が壕ばたを柏崎の方からまはつて停車場へ通ずるのなどが主なものであつた。そして街を出盡れる時には下組町、拍崎新町の二線が、更に下組町一線となつて湊街道といふ名につながつた。

青森縣はその東の隅三戸郡の主腦である八戸町は、この市區を中心にして周邊に擴がつた。東西が二里三十町、南北が二里十二町、大字の數が四十六、戸數三千、約二萬の人口を持つてゐた。青森縣廳を距ること二十七里餘、上野驛から八戸驛まで四百一哩一鎖あつた。

三戸郡役所は鳥屋部町に、其すぐ前に青森地方裁判所支部八戸區裁判所がある。其他の官署は停車場通に集つた。八戸町役場の向が八戸稅務署、その隣に八戸警察署があつて、その通を西へ一町程の所に八戸郵便局があつた。

學校には上り街道の松並木の間にある縣立八戸中學校類家の正榮山本壽寺の木立によつた縣立八戸實科高等女學校、その裏手に私立の八戸女塾といふのもあつた。馬場町に八戸工業徒弟學校、並んで八戸尋常小學校、おなじ場所に、雲を突くやうな金松の老木を前にした八戸高等小學校とがならんで、停車場通の一區域を占めてゐた。町組町には長者尋常小學校があり、中居林に中居林尋常小學校がある。私立東奥盲人學校は十一日町に在る。番町には八戸聖公會附屬の幼稚園があつた。

特設電話は八戸のそれから鮫の特設電話につらなり、八戸郵便局で交換事務を取扱つてゐる。今では長距離電話が五戸や青森、下北半島の要所と聯絡して通じた。八戸水力電氣株式會社は八日町にあつて、第一第二の二つの發電所から電力を享けて、これを八戸から小中野、湊、鮫、尻内、五戸新井田、島守などの町村に、電燈と電力とを供給してゐる。

新聞は三つあるが、日刊新聞は未だに生れなかつた。「はちのへ」と「奥南新報」とは月十回、三日目三日目に發行してゐる。「はちのへ」新聞社は長横町に奥南新報社は番町にある八戸實業時報」は月三回五の日に其社から發刊した。ほかに縣下の「東奥日報」「陸奥日報」「青森新聞」「岩手縣の「岩手毎日新聞」の支局がある。月刊雜誌「實業時論」はこの七月から八戸實業研究會といふのから創刊された。

銀行は、階上銀行、八戸商業銀行、五十九銀行八戸支店の三つが三日町に集まり、泉山銀行は十三日町の上角にある。

會社には八戸印刷株式會社(長横町)八戸實業鑛工社(窪町)泉山醬油合名會社(徒士町)大久保酒造合名會社(二十六日町)八戸無盡合資會社番町檜舘合名會社(八日町)合資會社大光商會八戸カーバイト工場(外中居三菱合資會社尾去澤鑛山出張所(番町)などがあつた。

娯樂場としては、鍛冶町に活動寫眞の常設館新開座があり、二十八日町には、一昨年市川荒二郎一行が開演中火を失して俳優數名とともに燒失した當座のあとに新築された

建坪三百五十坪、間口十六間、奥行二十五間、觀客千名を納る八戸の町には過ぎたやうな錦座があつた。

公園は二つあつた。街の南を埋めるやうに起つた丘陵がずべて老杉を以て蔽はれ蓊鬱として、馬淵川と新井田川との落合に近い平野のうちにひろがつて、動もすれば乾燥しきつて了うやうに見える八戸町の背景となつて、落着きとうるほひとを保たしてゐるのが長者山であつた。鳥屋部町から郡役所裁判所の前を通つても、鍛冶町から新開座を横目に見ても、この山へは上られた。緑の葉の重なりが日光を多く透さずに蟬の聲が湧くやうに起つた。風の涼しい樹間を通して迥かに太平洋の碧の色も見られた。街の姿も下瞰された。丘の上は平地となつて南部の遠祖新羅三郎義光の靈を祀つた鄕社新羅神社があつた。社殿の結構は界隈隨一で彫刻の丹青はなほ麗はしかつた。八坂神社牛頭天皇其他を合祀してゐて陰暦六月十五日の祭日には「奉納八坂神社」と紙幟を書て子供等がよく集まつた。此日氏子は胡瓜を神に供へた。年寄達は其日までは胡瓜を食べなかつた。春は櫻の花が咲いた。彼岸櫻の一株がそのうちで見事であつた。櫻の馬場に並んだ山櫻の老樹が殘りすくなに枯れてしまつて物淋しくなつた。その下では九月の祭に打毬の奉納があつた。嘗つて明治十四年明治天皇北巡の砌御覽せられた折の記念に建てた打毬の碑は枝垂柳の下に靜かに立つてゐた。碑文は川田剛の撰で書は金井之恭。裏には西四辻公業朝臣の「武士のけふの

毬うち雲井にもあげしその名はよろづ世までに」といふ一首の歌が鐫りつけられてあつた。古くは長治の山といつたといひ、一名を黄眉山とよんでゐる。公園として見た時にはその林間の逍遙にいゝところであつた。徑はその麓中腹などをめぐつてゐた。西麓に臥龍山禪源寺、南へまはつて月溪山南宗寺がある。安立山仙壽寺のあとは、新羅神社の社殿のすぐ裏手にあつてそこに舊藩主の御靈屋があつた。玉垣のうちに丸い墓石の數々が蕭々と松吹く風の音をきゝながら眠つてゐた。すこし山から離れたところに名久井岳にある白花山法光寺の分寺石田山光龍寺がある。南麓馬場のすぐ下に福聚山大慈寺がある。山門の仁王の八戸にあるのはこれ一つだけだつた。長者山の南裏は糠塚から板橋へかけた農村で、八戸町へ供給する野菜はこゝから作り出された。公園の一つは三八城山といつて八戸城の址であつた。昔は京が崎といつた其處があまりに今は淵開して幽邃の趣を見せなくなつたが、八月六日の例祭には夥しい人出で、武術や神樂の奉納があり、狼烟は此處の名物のやうに思はれた。簫篳篥などの響は群集の間を縫つて高く韻いた。昔のまゝの壕はめぐらされてゐるが水は涸れてゐた。縣社三八城神社が鎮座されて藩主の諸靈が祭られるのだつた。其傍に三戸郡の招魂碑が建てられて八月七日は招魂祭が行はれた。お庭の松、お物見なども數年前に枯れたり崩れたりして芝生のうちに梅の樹と櫻の若木が澤山植ゑられてある。お物見から城下の青

田を見下すのはよい景色であるけれども、すぐ傍に挽材工場があつたり、八戸停車場があつたりして絶えず黑い煙を吐いてゐて公園としてはあまりに貧しい姿であつた。門を出るとすぐ八戸停車場が見えた。其道を隔てゝ靈神社がある。老杉に圍繞された中に壯嚴を極めたところで山櫻の老木がその美しい花の色を添綴して見せた。

寺院は法界山天聖寺(十六日町)萬壽山玄中寺(下組町紫雲山來迎寺(朔日町)平澤山本覺寺(十一日町)法照山願榮寺(十一日町)の外はさきの長者山麓と類家とにあつまつてあつた長横町からの街道を溜池の向ふにある杉木立の中には正榮山本壽寺があつた。晩鐘で名のきこえたところである。その後に自淵山長流寺、その後に新井田の對泉院の分寺新月庵がある。其前にすこし離れた木立の中に月峯山廣澤寺があつた。其處には二十八日町にある延命地藏尊とともに名高い地藏尊があつた。

教會は聖公會(下番町)八戸メソヂスト教會(中番町)浸禮教會(朔日町)天主公教會(下組町)天理教のそれは柏崎にあつた

八戸產馬組合の事務所は荒町から北へ通された道の突あたりに溜池を後に控へてあつた。青森縣農事試驗場の八戸分場は三八城公園と壕一つ隔てゝ隣つたもとの中學校の敷地にあつた。麥や馬鈴薯や大豆や甘藍やの緑の色が目を新しくした。その向ふの舊藩主南部子爵邸の立派な昔ながらの門は前を通る人々を振顧へらせずに置かなかつた。門内の枝垂櫻も珍らしいほど大きいものだつた

とりたてたかうした官衙公署銀行會社神社佛閣などの外に、いくつかの挽材工場が町のめぐりにあつた。製粉工場が、精米工場が、煉瓦の工場が、織物工場があつた。養蜂場や養鷄場や、家畜市場や屠殺場やがあつたが、街の大通は殆んど皆商家が簷を竝べてゐるのであつた。米や麥や大豆や粟や稗やが町の周圍の農村から運ばれて來るので、其途にあたる新荒町荒町鍛冶町には穀物屋が多かつた。十六日町(馬喰町)には青物市場があつた。牛や馬やの肉賣る店が多かつた。六日町(肴町)は魚市場だつた。鮫港から獲れた魚の外に、そこから南へ轉じた南濱からのもこゝに出た。

八戸の文明は西から東へ流れた。それは上り街道から入り込むといふことでもあつたが、鮫港が東から誘致するそれでもあつた。明るい方へ明るい方へと進んで行く文明が東へ東へ流れ流れては鮫から吹き返して來た。吹き返すの風は強かつた。海を渡つて來る文明は山や丘の背をたどつて西から來るものより強くもありまた烈しくもあつた。そしてそれが吹き返すといふよりはその方へすべてを誘致するやうに見えた。八戸の繁華の中心はそして漸次に東へ移つて行つた。荒町二十三日町のあたりから(三つ菱の紋所を押したてゝ京大阪との間を貿易して一代の豪奢を極めた七崎屋の家が失はれたり、十三日町から板屋の暖簾がはづされたりした昔でなくとも)二十三日町から十三日町とさうした店が消えるとともにだんだんに遷つた。三日町の繁盛は長かつたが、今では八日町に移ら

うとしてゐるものゝ如くに見られた。けれども縦と横との主線が交叉する現在の形勢は、十三日町三日町の間に繁華の鍵を握らして置くのであつた。

八戸の町の繁昌は多くは鮫から吹返す文明のそれであつた。それが鐵道が通じてから後は、往時の中央集權は夫れ夫れ分裂してしまつた。岩手縣の久慈輕米一戸福岡。上北の七戸三本木野邊地から、下北の田名部、脊梁山脈を越えた秋田縣の鹿角一郡は、一度、八戸の手を經てから物貨の集散をなされたものが、その一つづつが直々に取扱はれるやうになつてからの八戸には、昔日のやうな内面からの強い力が働いて見えなかつた。小手先の働きだけのやうに八戸の街とその郊外の部落部落とを相手の小口の財貨の運轉に過ぎなかつた。昔のやうな大きいことは無くなつた。それに加へて八戸が、東北線尻内驛から僅か三哩そこそこの間を支線で通じてゐるといふことが、西からの文明の惠澤を享くる事さへすくなからしめた。同時に鮫港が鐵道にそのすべてを奪はれてからは、そこから起る吹かへすの風は八戸に何等の影響をも與へなくなつたのであつた。海が暴れると白い鷗の鳥は悲しさうな聲で街の上を飛んでゐるいた。川筋を傳はつて上つて行つた。今ではたゞ明るい方へ明るい方へと大洋のほとりに向つてその發展の方向を八戸は求めてゐるのであつた。

町のあちこちに火の見櫓が聳えてゐた。昔特に八戸藩が火の見櫓を許された程のところからでもあるか、消防の設備はよく整つてゐた。東北一帶の市街の多くが、風の常常吹く竝に築かれてゐるのは、土地の自然の上から已むを得ないことであつて、八戸も亦それをまぬかれないのであつたが、幸に三十年以前その火の見櫓が、街の眞中で瓦落瓦落と燒け落ちた時から今まで甚しい慘害を蒙ることなしに過ぎて來たのであつた。四部にわかれた八戸消防組の設備と訓練とは他に多く見ることが出來なかつた。毎年五月に行はれるその演習は地方の行事として今は忘られぬものにされた。其日長者山は近郷近在はもとより五戸三戸野邊地青森岩手の町々からの人々で雜沓を極めた鍛冶町の溜池では注水競爭が行はれた。その溜池を始め町のめぐりには溜池がいくつもつくられてあつた。そこにはえぞのみづたでの花がほの白く搖れてゐる上を燕がすいすいかすめて飛んだ。鷗が來て浮いた。鴨は白い羽に日を光らせた。水の上にはボートを泛べたりしてゐた多はスケートがこの氷の上で行はれた。

行事の主なるものに豐年祭があつた。三社の大祭があつた。豐年の瑞だといふ雪が、野山を包んでしまう頃、もとは正月の十四日から三日だつたが、今は二月の十七日から三四日の間行はれた。農家のある町のうちの若者等も出たが、近郷の若い者だちが三人五人の松に鶴などを染めた直衣着て右手に扇左手にえんぶりを持つた烏帽子かぶつた男を先立てて、村々の旗をかざして笛太鼓鉦の音で囃子をとり、二三十人から五六十人の組々が町の中を摺つてあ

るいた。長い大きい烏帽子には田を仕つくる有様を描いたり、寶づくしを描いたりして色々な紙を切つて前に垂れた房が頭を振る度にさらさらと鳴るのが勇ましかつた。大黒舞やえんこいんこや、苗取、早乙女などもそれについてあるいた。長者山に勢揃へして一わたり町の中を練りあるいたあとは、隨意に出入の家得意の家々を摺つてあるいた。家にはひると道化や茶番や金輪切や田舍芝居など色々の藝づくしをやつた。村々からはその假裝する姿を見るためにぞろぞろとついてあるいた。昔の月夜月夜には凍つた空氣の中を冴えた音が勇ましかつたが、今では時として暗の夜や宵月の夜などでその趣味が滅殺されて來た紅染の頭巾を欝金の手拭でくくりつけ、小鈴のついた花輪で手首を器用に動かし動かして子供等の揃つて舞ふえんこいんこも今ではすくなくなつて來た。

正月から盆、それからはお祭が待たれた。靈神社と新羅神社と神明宮との三社の大祭は一緒に行はれた。神明宮は二十六日町(七つ屋)にあつた。古い大銀杏の下にあつて禊の晩には大層賑はつた。月の輪をくぐる人達は夜を徹してここにゐた。踊の輪は境内を埋めてひろがつた。いつもは其近所に小屋掛して色々な見世物が來た。九月一日靈神社に集まつた三社の神輿とお供の行列が、神明宮を先立てて町の上手の通をねつて長者山に渡御になつた。氏子は各自に趣向をこらして山車をつくつた。神明宮には神女が供についた。長柄の傘を翳した子供だちの姿は

美しかつた。新羅神社には十二支劔鉾や武者押や虎舞や草刈山路がついた。靈神社には長い槍やさぎりやが供についた。町じるしの鉾は今では幾つも加はらなかつた。行列は何町も何町も續いて其間はいたるところから集つた見物の人達で町中は通行することもならぬほど雜閙した。夜は宵宮に加へて湊や鮫の踊子の屋臺が練つてあるいた。鶏舞や駒踊や願人やが町々をせきとめるやうに見物を吸收した。中日には長者山に打毬があつた。三日目のお歸りには長者山から出て町の下手の通をおなじやうに練りあるいて靈神社へ神輿を送りとゞけるのだつた。お祭が濟めば八戸の町には冷たい風が吹き出して來た。

八戸をいふときはきつと八戸煎餅と菊の花とをいつた八戸煎餅は南部煎餅ともよばれた。隨分古い時代からあつたものらしい。隨分廣い區域へひろがつて行つた。奥羽の六縣から北海道をかけてひろがつてゐた。八戸の味は八戸煎餅の味が解らなければ解らないと言はれた。まつたく八戸煎餅は麥の粉に鹽を加へてしめして胡麻をふりかけて無雜作に丸く燒いただけのものだつた。何の味もない香もない。がよく嚙みしめると恍惚たる香があつた。忘れられない味があつた。一度食べるとそれから離れることが出來なかつた。八戸に育つた人は八戸を去つてもこの煎餅なしには暮せなかつた。八戸のためにはよいことか惡いことかは知らないが、あくまで土地に執着するところの何かしらがあつた。八戸煎餅の味が近頃惡

くなつた。八戸の人はそれについて默過してゐるところを見ると、八戸の味はすこしづつ悪くなつて來てゐるのかも知れなかつた。古くは松の木で燒いたが今は炭火を用ゐる。そのためにも口あたりが堅かつた。味もそこからも失はれた。それよりはだんだん粗悪になつて來たためといつてよかつた。

菊の花は八戸の名物であつた。それがために八戸の名が世間に紹介されたことも多かつた。黄色な「阿房宮」といふ今食用にしてゐる菊は八戸で生れた。八戸の藩士稲葉某が「黄寶珠」といふ花から作り出したので、今のやうに盛んに培養されるのも、食べられたのも隨分あとの事であつた。甘味があつてすこしの苦味もなく、香氣が至つて高く、もとも花を見るのであつたから輪も甚だ大きかつた。蕾の選びやうで八月から十二月までは生のままなのが茹でて食べられた。鹽漬や粕漬にしても食べられた。今では其罐詰が多く作られた。乾して海苔のやうにしたのは菊海苔といつて、翌年の新しい花が咲くまであつた。湯を通しさへすればいつでも生のもののやうにして味はれた。八戸の郊外中居林、板橋、糠塚から生なものは町に出た。菊海苔は今では三戸郡一體にひろがつて産額も年々に增加した。

八戸の菊は大菊の培養地として關西の京都と竝び稱された。小井川元吉氏等が明治十八年に佳友會といふものを組織してから三十餘年になる。日本の大菊すくなくも關東以北の菊の培養を復興したのはこの會のやり了ふせた仕事と言つてもよかつた。宮中の觀菊の御宴が復び興されたのもこの仕事などが與つて力があつたとも言はれた。菊海苔の名も此會の人達の骨折でその名をなしたので、地元では却つて名に押されてつくり出されたやうなものであつた。今はこの佳友會とあとで出來た千代見會と近頃生れた八戸國花實生會といふのとあつて盛にこれが培養をなしてゐる。名花もすくなからず出來た。古くは「秋の山路」「弘徽殿」「園の譽」「天ケ下」や「龍の立濤」もさうだといはれた。近頃では「晴間の富士」「歌麿」「落霞」「大御代」「惠の露」「春興殿」などであつた。

清酒や醬油やは、原料にする米や大豆やが土地から多く出來るので、年一年とその醸造高が多くなつた。その品質もいちじるしくよくなつた。「梅香」「老の友」「月松」「加茂川」「稲川」「八甲」「舞鶴」「男山」「千歳」「岩の泉」「山櫻」「磯の松」などの銘酒の看板は街のどこにも多く見られた。「白梅」「白藤」「龜甲加」「龜甲壽」「龜甲泉山」「弁」などの醬油が地方へ輸出されるのもすくなくなかつた。桐材の名は南部桐といつて早くら世に知られた。麺類の製造や鰹節の製造鰯割煮干なども日に日に聲價が高くなつて行くばかりだつた。

かうした八戸の街の上を時鐘は偶數時を鳴り渡つた。櫻と松とを栽えたもとの馬場、今の馬場町にあつた鐘撞堂が今は昔の大手の門の先下乘札のあつたあたり八戸町役

場の地内に移されたが、昔のまゝの鐘の音を八戸の町の人だちに響かしてゐるのだつた。元祿二年二代の藩主直政が伯母の冥福を祈るために鑄さしたものといつた自ら作つた銘が彫られてあつた。警察署の建物や蒸氣喞筒の置場の間に不調和な姿をしては居るけれども、昔を今に語るものとしては懷かしい限のものだつた。物みなが新しく新しく代つて古いものが壞された中に遺された一つであつた。

□

八戸の町を東西に貫いた縣道を西へぬけて十町ばかり行くと、通つてゐる其道が根城の城址を横ぎつてゐるのに氣がつかれた。埋まつた空濠が道を横ぎつて見えたり、砦のあとが其まゝになつて麥の穗波を搖るがしてゐたりしてゐた。馬淵川がまだ遠く北を流れてゐた頃のこと、その右岸に城下の街がつくられてあつた五百八十年の昔は、今から想像するさへ出來なくなつてしまつてゐるが、南部の藩祖南部光行の三男に、甲州破木井に城を築いてこれに居り、館野、三牧、破木井の三郷を領してゐた破木井六郎實長といふがあつた。その曾孫に又次郎師行といふがあつた。建武の年陸奥の國司に任ぜられた北畠中納言顯家卿に從つて來て國代となり、八戸附近一萬石を領してこゝに居城を構へ、奥州鎭護の根城だと顯家卿から祝はれた言葉をとつて根城と呼んだ。そして南朝の爲に忠誠をつくし、後では津輕や甲州を合せて三十五萬石を食み、政長、信政、信光と相嗣いでその忠烈をうたはれてゐた。信光の弟の政光の時に南北和合となつたが政光は義を唱へて降らなかつたそのために甲州や津輕の領地を失つたけども、父祖の業をうけて此處に斃るれば本快だといつて遂に節を全くし五代の忠誠を竭してゐたところであつた。それから數代政經の時になつて八戸を以て氏とした。更に數代のあと豪雄政榮が生れた。また更に數代彌六郎直榮に至つて岩手の遠野に移つた。この間の二十二代のことを前八戸藩とよぶのであつた。この五世にわたる忠臣のために此の城址に表忠の碑を建てようといふ企てが唱へられた。まさに時機を得たものといふべきである。何のおもひ出もなしにかうして失はれて行く大節の古跡のためにその忠烈のために一日も早くその碑を仰ぎたいものだと願ふのだつた。本丸のあつたあたりかと思はれるところに古い古い公孫樹が南に枝をむけて靡いてゐるのが、なほ南朝の天子を敬慕するものゝ如くにも思はれた。馬場のあとはそのすこしさきの道の左にある。東善寺の寺のあとも八幡宮のあとも畑の中や藪のうちに顧みられずに朽ちてゐる。

その城の東に丘陵が亘つてゐた。陵の東北端が町見坂といつて八戸町やその附近の眺望によかつた。その丘は上り街道へつながるやうに出ていつた。其間の谿間を白山と呼んで躑躅の名所といはれてゐたが今はさほどの賞すべき所とも思はれなかつた。丘の下の溜池、白山川を湛へた岸に三級山龍源寺があつた。白山川の水は八戸の町

へひかれて用水となつて町の兩側を下つて行つてゐた。

根城が遠野へうつつたあと盛岡南部二十七代利直が京ケ原に繩張して八戸城を築いて七男の直房を分封した。これが寶文四年で後八戸藩は此時から始まつた。八戸城は今縣社三八城神社のあるそれであつた。此時もとの根城や遠野にうつつてあつたものが八戸に戻つて來たり、新井田の城下からも風を望んでその城下に集まつて八戸の城は殷盛をいたしたが、根城はかうして荒廢してしまつたのであつた。八戸城は直房から直政、直政から通信、廣信、信興、信依、信房、信實、信順と九代つづいて來た時に、世は明治維新となつたのだつた。

根城から一里餘のところに八幡があつた。杉の林が一帶を包んだ中に鄕社櫛引八幡宮が祀られてあつた。神地莊嚴を極めてゐた。古くは社前の馬場で流鏑馬をやつたりしたけれども今は全くすたれてしまつた。陰曆の八月十五日には近鄕近在はおろか二戸九戸上北下北などからも參拜の人が踵をついだ。國寶として藏せられてゐる鎧が四領あるうちで、緋縅の鎧が一番人口に膾炙してゐた。枝菊の金具が燃ゆるやうな緒通毛に今も輝いてゐた。銀の七五の桐の金具のある卯の花縅の鎧は御村上天皇の御領で、八戸彌六郎が軍功によつて拜領したものであつたとも言はれた。外に蘭陵王の面や其他の面が十餘口などもあつた。この宮の祭の日には木で拵へた粗末な玩具の馬を賣つた。始めは黑かつたのが今は唐紅色で染められてゐる。八戸馬とも八幡馬ともいつて名高いものだつた。ほかに八幡箱や八幡槍も賣つた。

八幡の裏手に櫛引がある。馬淵川に添うた斷崖の上に櫛引左馬頭の館の址があつた。村の上流に矢倉の懸崖があつた。大槻の妾を殺した話や傳三郎の娘の話や八の太郎の話や呪田の話や八鞍の話や、このあたりを中心として傳說の多くが集まつてゐた。

馬淵川を渡つて道は西から南へとすすんで行つた。三戸街道とこれをよびこの縣道を鮫港道と呼ぶのだつた。

東海岸道は八戸の町を南から北へ突貫けて通つて行つた。北へ走る道は堤町から町の外へ出た。溜池を越えたところに天滿宮があつた。長根の村を通ると馬淵川の河原へ出た。大橋の袂で三戸街道が總門町の溜池を越えた新組から岐けた街道と落合つた。そして渡るとまた左と右へ別れた。左は五戸街道で上長苗代の稻田の中を尻內へ出て西へ進んだ。右の東海岸道が下長苗代のひろがつた青田の間をぬけて行くこと一里位のところに小田があつた。北を限つた丘陵の麓にあつて小田八幡宮があつた。其上の「高い高いと高館あ高い、南部八戸あ目の下だ。」と唄にある高館で義經が落ちて此處に據つたところだと口碑が傳へた。八幡宮には義經の手寫したといふ大磐若經などを藏してあつた。

この道は丘をこえてあるひは海岸の平沙を傳はつて北へ北へと走つていつた。蒼前の一つとして名高い木の下

の氣比神社へはこゝから三里ほどあつた。

南へは鍛冶町からぬけて出た。吹上で久慈道と分れて階上岳を目あてに東へよるやうに走つた。舘越山の下から街道のうちに石灰石を運ぶための馬車鐵道の軌道が畳かれてある。石灰石は毎日毎日八戸驛から秋田の鑛山へ送り出された。八戸町にあつた尾去澤鑛山出張所はこの仕事をするためのもので、軌道は新井田川に架かつた新井田橋を越えると川に添うて城の裾をめぐつた。そして一里ばかりで松舘といふに達した。石灰岩はこの谿谷の間から山をきり崩して運び出してゐるのだつた。この一圓は皆石灰岩から成つて谿流を挾んだ隨所に風景の見るべきものが多かつた。中に閉伊穴とよぶ洞窟があつた。昔は川を流してゐた水蝕作用のあとでもあらうか、川を穴の外に轉じて窟は出來てゐた。窟は岩手縣閉伊郡宮古の海岸まで通じてゐて、そこでは小舟で出入された。八戸穴と彼方ではよんでゐた。けれどもその間が通じてゐるかどうかは全くわからなかつた。窟の口から四五十間さきは細く且低く瀦水がところどころにあつたり、暗さも暗かつた。別なところに明りを見せた穴へぬけて又になつてはゐたが奥へはもう行けさうもなかつた。蝙蝠が蠟燭の火に驚いてばらばらと飛び出した。溪流は水烟を颺げた。岸の岩石が樣々な形をなしてゐた。大文字草の花がふらふら動いてゐる下で河鹿が囀曉と聲を流した。けれども今はその窟の近く迄この谿流は石灰石を掘り出すために崩壞されてしまつた。白曝れた崖が絲の底に無慘な白骨のやうに見られた。これも時世の變遷として仕方のないことらしかつた。石の產額は今後何十年かを經るまで盡きさうが無かつた。質の上でも指を折らるゝものだつた。

閉伊穴の近くに梅の老樹が一株あつた。昔は姥が梅と呼ぶそれであつたが、臥龍梅といふが枯れてからはその名で呼ばれてゐる。蜒蜒として地を匐つた姿がいゝ。花は白いが淡く紅を暈じてゐた。近づいて見てもよいが階上街道から望んでもよかつた。

新田氏の祖は南部信政といつた。根城に城がきづかれてあつた頃新井田川のほとりに城を築いた。今新井田の舘とよんでゐるのがそれで古い姿はそのまゝのやうに地形には遺されてゐた。橋を渡つて直ぐな通が横町と呼ばれるやうに、この城は川に添うて伸びたのであつた。京町今町などの名ばかりがいたづらに殘された。横町から舘へ折れる左の道、京町をすゝんで右に折れたところに新田氏の菩提寺貴福山對泉院があつた。本堂は往年火をうけて燒け失せたが山門鐘樓はもとのまゝ殘つてゐた。庭園で名高かつた。自然にあつた巨岩の底を利して池がつくられてゐた。長く佳友會の菊をこゝに集めて菊の名所としてよばれたが、今では前年のごとくではなくなつた。

新井田の村を出はづれると廣い野が展かれた。蒼前平とよばれた廣野で鮫の野や白銀の野金濱の野などに連なつて擴がつた道は野の上を走りぬけていつた。三里ほど

で階上岳の麓に達した。階上岳の東麓寺下に名高い寺下観世音があつた。海潮山應物寺の亡んだあとをたづねるのも興あることだつた。大同二年七月の開基で仁治の年に火災にあつた時百餘の堂舍は焦土と化してしまつてもなほ此靈地を去りかねたものが千指を數へたと言つてあるが、今はそのあと方もなくなつた。五重の塔も倒壞した燈明臺も朽ち果てた。寺下の瀧があるだけだつた。それでも觀音樣の緣日には遠い遠い路をぞろぞろと善男善女がたどつて行つた。

此處から水をひいて蒼前平を開墾しようとした。なほそれを鮫に下さうとした。蛇口胤年のほつた堀は中道でその人とともに消えたがそのあとはなほ昔の八戸の大人物を語つてゐた。

久慈道は吹上で東海岸道と分れた。中居林へ出る前に赤い煉瓦造りのカーバイトの工場があつた。松舘から出る石灰石を碎いてこれを製造した品質の良いのからして昨年の創業でありながら評判がよかつた。

中居林から是川のほとりへ出る道が分れた。是川の村は川を挾んで丘陵のそこここにあつた。村中の畑の畔や垣根には桃の木がよく植ゑられて花の頃には紅霞をたなびかした。桃は油桃だつた。そしてその實が多く產したが年々にすくなくなつた。村では竹細工が出來た。柿も多かつた。是川の上流を鷹の巢川といつてそこに島守の村があつた。虛空藏山があつた。その上流の世增は紅葉がよかつた。八戸水力電氣會社の第二發電所はここにあつた。是川の第一發電所のところから久慈道へ出られた。水野といつた。そこのすこし手前に八戸から二里ほどのところから左へ折れて谿間へ上る道が分れた。金山澤といふところは其道の上にあつた。兩岸が村の上で迫つたところは岸の巉岩は何十丈もあつた。崩れ落ちるやうに川に臨んで日光を通さなかつた。夏は河鹿、秋は紅葉が美くしかつた。川はその斷岩をくぐりぬけて通つた。長さは三十餘間、水の流れ流れたあとは窟の中全面に鱗の形をきざみつけた。そのために蛇脫穴とよんだり、脫龍洞と呼んだりした。岩は石灰岩であつた。川の中には岩が多く流れをせぎたてゝは飛沫を高くあげた。激する音は岩の腹にひゞきひゞいた。川上には岩の起伏が面白く續いた。そして一里ほどのところも一つ小さな窟があつた。小脫龍洞とよぶのはこれだつた。そこを小松倉といつて河岸一帶の丘陵が大理石を產した。質のよいことは日本一といはれた。量も多かつた。一頃八戸名石會社が發掘に從事してゐたが今は中止してゐた。そして專ら石灰石の採掘に係つてゐる。

小松倉からすぐ久慈道へ出られた。久慈道は岩手縣九戸郡久慈の港へ通つた。八戸からは毎日毎日馬車がこの間を聯絡して道程は二十四里あつた。この街道の上を岩手縣の東南部一帶から產する木炭が馬車で運ばれた。日に何十臺何百臺の馬車はいつも續いた。これが八戸炭と

なつて八戸驛と湊驛から積出されるのだつた。

鮫港道の上を東へ八戸の街をぬけたところを湊街道とよんだ。その間の距離は左程あるのでなくてゐながら、いつも長いやうに感ぜられた。そこからは水田麥畑の上に鮫灣の水がもう碧い線を帶のやうにひいて見せた。街道の上は乘合馬車がひつきりなしに往つたり來たりした。黑塗の二人乘や四人乘の馬車が往つたり來たりした。何年か前ここを土煙を颺げて馳驅した自動車は、あまり早まつたことを悔いるやうに八戸と鮫の間から消えてしまつた。街道のあちこちに箒立したポプラーはここの自然に調和してゐた。其木の繞らされた中に、御影座といふ劇場の硝子が光つた。そこから「みなと」と呼びなされた小中野の村はすぐ前に擴がつた。左比代には槻の木が多かつた遊女街であつた頃の色彩を思はせるやうに、萬葉亭といふ旗亭がのこつた外は、新井田川と馬淵川との合はうとする狹い區域、砂地の低い地域はすぐ乾燥しきつて、いつもばさばさした色を見せたが、南裏の浦町や新地はともすると水を湛へた。そこらが拓かれる前の蘆荻の沼の名殘もあちこちに見られた。北裏も新堀川のほとりが窪んで濕地らしく見られた。新町の通には商家が竝んでゐた。八戸名石株式會社、湊郵便局などがその通にあつた。階上銀行の支店、八戸商業銀行の支店、五十九銀行の取扱所、近頃になつて金融機關が八戸から東漸して來た。北裏には漁家が多かつた。八戸支線の極端驛湊驛はすぐ川に臨んだところにあつた。名石會社の積出す石灰石は、新井田川を鹽入から舟で運んで來てはこゝから送られた。岩手の東海岸九戸郡から多量に產出する木炭は、海からするのは發動機船や小廻船で荷揚されて汽車に積まれた。八戸と湊からされる木炭と鰮の〆粕とは夥しいものであつた。停車場の向ふに挽材工場が竝んでゐた。材木は川をどつちからも流されて來た。

浦町は遊廓のあるところで絃歌の聲は絕えなかつた。花月樓、隅田樓、錦樓、旭樓、要扇樓、輪島樓、三芳野樓、吉田樓、大山樓、花泉樓、大黑樓などゝ書いた暖簾や提灯が竝んで見え、二階には「貸座敷渡世」と書いた看板が違つた時代を思ひ出させるやうに雨風に曝れてゐた。浦町がすこし裏手にあたつて新地の遊廓が續いた。新菊樓、朝日樓、新玉樓、大正樓、萬葉亭支店、小松樓、曙樓、柳本樓、親睦樓、魁春樓、富貴樓、長谷川樓などが簷をならべて、舞妓などが格子の前に彳んでゐる姿などよく見られたが、新しい建物の多いだけ感じも粗かつた。すぐその向ふの杉の中に常現寺といふ寺があつた。そこには魚籃觀音があつた。昔湊街道にあつた仕置場が取拂はれて、供養の碑はこの境內に移されてあつた。寺のぐるりから湊川(新井田の下流の名)の左岸に堤防のきづかれたのは二三年あとだつた。新地も浦町も新町も殆んど小中野一圓をすぐ浸してしまふ氾濫はそれからまだ起らなかつた。どれだけを防ぎ得るか試みられぬながら安心してゐることだけは出來たのだつた。堤防を越えたとこ

ろに黒い諏訪の杜があつた。昔はこゝに大船が錨を卸したところといはれて、杉の林の中に大きな巖石が頭を擡げ擡げしてゐた。往年までは湊祭といつて、湊の大祐神社の祭が川口から舟を艤してこゝまで漕ぎ上つて來て、陸を街筋を通つて行列は還り還りしたが、近頃はしばらく中絶した。其代りのやうに四五年前から舊七月の二十日頃流燈會がこのあたりで行はれた。灯は水にうつつて數知れず流れて行つた。舟の中では和尚さんだちの看經やお婆さんだちのお念佛藝妓だちは三味を彈いてそれに和して賑かに下つて行つた。暑い頃別ても夜の巷で行はれるのだから、近郷からの人出は橋を搖がし兩岸に垣をつくつた。狼烟はその間に空高く破れた。

川に近い方には漁家が竝んでゐた。家の數八百、人口は四千程あるこの村の主な産物は鰮の〆粕であつた。その他には旅へ出る女が多かつた。八戸の女として上北下北秋田縣の鹿角仙北などの町々、五戸三戸から岩手縣一帶に亙つて分布されてゐるのはこの邊から出たのであつた。

對岸は湊村だつた。上の山の丘陵が岸近く亙つて、川口からの海と北にのびた汀線の波とだけを橋の上から見せて目を遮つた。浪の音だけは丘を越えてそこの灣から聽えて來た。橋を湊橋といつた。色街に近いそれを思案橋ともいつた。人馬の往來の繊るやうなのは縣下で一二と言はれるのだつた。橋の向ふには泉山銀行の支店があつた。川に添うた町筋を本町といつて、その川口に近い方を下條川上の方を上條といつた。下條の丘の中腹に八阪神祠や大祐神社があつた。丘の上には十王院といふ寺があつた。八戸肥料株式會社はその右側にあつた海産肥料を主として取扱つた。高橋鑵詰工場はその前の河岸にあつた。その先に青森縣水産試驗場の湊水産傳習部があつた。白鷗丸はこの生徒を載せて波を切つてあるいた。鰹の漁が主とされてゐた。川口の水中に川口明神が祠られてあつた。上の山の岬端を舘鼻といつて、槻の木立の中には御前神社があり、岬の上には大日本水難救濟會湊水難救濟所があつた。警報や信號を揭げ、救助船の必要ある時は鈴を鳴らしてこれを艤した。眺望のよい所だつた。鮫港は一眸のうちにその晴れた姿を收められた。春梁山脈八甲田連峯戸來岳名久井岳を西へ懸けて望んだ。山が吐く雲、棚引く雲、別ても春かうとする落輝が染めた山上の雲がよかつた。馬淵川が流してやる夕照もよかつた。月によかつた。蟲の聲によかつた。漁見によかつた。南には階上岳が己が育てた新井田川の行衛を見まもるやうに聳えてゐた。川口を入る帆影は眼をかすめて通つた。

二つの川は岬の下で一緒になり海に宗した。其處には川が運んだ土砂が堆積し堆積し海はそれを流すことを拒んだ。川口は日に日に閉ぢられて水路は右へ左へ轉じた。舟の出入がそして年一年と困難になつた。水先案内がそこに立つてゐたり滿潮を待つたりして辛じて出入したりした。湊、小中野兩村の漁船が皆湊川に繫るのに、泊から來

る船岩手から來る船、そのどれもが繫つて、小中野湊の消長に關するのに、八戸町の興亡に係るのに、手を束ねて見てゐるだけだつた。何度もこれが修築を企圖し建議もしたけれども、凡そ七十萬圓を要するといふ工事は、これらの村々では如何ともしがたかつた。せめて鮫の築港が成らばといつても宿年の願でありながら能はなかた。

戸數千五百、人口一萬五千、三戸口郡中八戸町に次ぐ戸口を持つた湊村の大部は丘の北麓の海岸に聚つた漁家であつた。川に添うた商家と、上條からの丘陵の上には農家があつた。上の山をきりぬいた道を越えて海岸には出た。道の右わきに八戸警察署の部長派出所があつた。汀に添うた道平沙の上の道は、上の山の丘陵から鮫、白銀蒼前平の原野につらなる。丘崗の下に浪の音の間をはせた。

漁家はつゞいて白銀にまた集まつた。白銀は湊村の支村で丘がまた海へ突き出て來たところにあつた。丘の中腹に三島神社、その下に三島川といふ清水の湧出する泉があつた。白銀一村の人がこの泉とも一つ清水川の水とですべてを辨ずる程多くの水清冷な水を湧出した。白銀でも鮫でもかうした泉を川とよびなしてゐた。そしてそこで米もといだし魚も料理へたし洗濯もした。三島川のところから、丘にのぼつて白銀の街はつくられてゐた。銀浪山福昌寺の甍は高く日に輝いた。けれども水利の不便な丘の上の街は火に何度も見舞はれて、其度に農家を殘したほかは海岸を通された新道(三十年ほど前に出來た縣道のこれを新道といつた)のそばへ居を移した。觀音坂、西の坂などの坂路を女だちが水桶を擔いで上る姿は、此磯村に忘れられぬ詩趣を添へるものだつた。

鰮は湊と白銀とでよく漁された。海岸の砂地は一面に魚で埋められて鱗の光が眼をまぶしがらせた。魚を煮る日は炊煙が一帶に搖曳して竈場釜場の火の底に唄聲が應じあつた。

舘鼻からこゝまでの海濱は砂地の遠淺で夏は海水浴のために方々から集まつて來た。維新の軍に孟春艦が擱坐したのはこの濱であつた。その時海岸守備の兵隊だと艦から見られたといふ若木の杉の木は、今大澤から丘の斜面を黑くここまで添へてゐるあの杉の林であつた。明治天皇北巡の際網曳を御覽なられたのも此處の濱であつた。允文允武の天皇を記念する何一つのものもない八戸や其附近であるから、ならうことなら白銀から鮫へ折れる岬、湯女杜の上になりと、其時の事でも記念したらと願ふのは私一人ではなかつた。侍從藤原朝臣公業卿の詠まれた「時しあらば雲の上まできこえなむ鮫が浦和のあまのよび聲」と其時の歌をきいたのも其事を話した時だつた。それよりは鮫の築港か先決問題かも知れない。湊川の修築が先決問題かも知れない。けれども難易の上からすれば根城の表忠碑や先帝追慕のための記念碑を建つるのは却つて先にすべきものかも知れなかつた。自動車の後に馬車を持つて來るよりは馬車の後に自動車を持つて來るのが文明

の程度や交通機關の利用の上から、いづれはさうしたことになるにしても順序であるらしかつた。易きから難きに入ることは常に考ふべきことであつた。

湯女杜を轉せば、海は岩石起伏の磯となつた。波は逆つた音を立てた。湯女杜の岬は海中に飛んで沖の島までの間に岩石を突出した。はるか鮫の前に横つたこの間を扇が浦といつたが、今では鮫灣一帶の稱に用ゐられてゐた。

「寄せて下んせ戻りの節は、一夜なりとも鮫浦へ。」「風はさが西沖ほど眞方思つた宮古へ寄せられぬ。」と此あたりで唄はれた甚句の唄のやうに、昔の鮫は宮古とともに陸中陸奥の太平洋岸の名高い船着場で、つひ此頃まで八戸の文明は此處からはひつたし、物貨の集散は皆此處でなされたのであつた。八戸でなされたのであつた。八戸藩のお手船、小寶丸、萬歳丸、幾久丸などの名はまだ年寄達の耳の底に殘つてゐた。船を繫ぐに、大綱を張つた岩は、海の中にも島の上にも繩掛石といふ名で殘つてゐた。けれどもそれは過ぎた夢であつた。其頃から唱ばれた築港のことが未だに昔のまゝ有耶無耶でゐるうちに、時の推移は海の仕事をことごとく鐵軌の上に易へてしまへ、鮫はとりのこされてしまつたのであつた。そして今ではそれ自身が持つた自然の風光をもつて知らるることになつた。

鮫の街は往年の火災のあと、古い昔の色彩が甚だしく消え失せてしまつた。そこの空氣氣分などもまた多くそのために失はれた。船着場から離れられない遊女といふものが、全く失はれたのもそれに因してゐた。けれども岸にのぞんだ石田や橋本などの水樓に櫓聲濤聲を聽きながら、絃歌の聲をきくにはよかつた。白い鷗が眼の前を白帆がよぎるやうにかすめた。白帆は波の上に鷗の泛くやうに搖れた。湯女杜、舘鼻、松ヶ崎には雲烟が搖曳した。朝の嵐氣の晴るゝ時にはこれらの浦のほとりがよかつた。山は甲田も乘鞍も戸來も泊も皆欄の前に雪を光らした。春の戸來岳の雪はすぐれて美くしいものであつた。孤島のやうに波の上に泛ぶ泊岳や恐山は懷かしいものであつた。夏の夕日が波を染めて渡るのは見事であつた。夕立は更によかつた。濃霧がすうすうと障子の外まで襲つて來るのも面白かつた。湊、白銀の渚にならぶ灯はよかつた。捕鯨船の搖れてゐる檣の上の灯もよかつた。晴れた暗い晩には尻矢崎の燈臺の光が見えもした。魚は皆新しかつた。積んだ船が入つて來るのは勇ましかつた。比良目や鯛やの味はすぐれてゐた。鮑海鼠海膽などは特によかつた。

島に菜の花の咲く頃からは鮫の世界であつた。島には嚴島神社を祀つてあつて、三月三日の祭には汐干狩に來る人が、町から濱への道にならびつゞけた。島の上には鷗が白く染めてしまう程とまつてゐた。芦が茂つて潮風によく靡いた。捕鯨船は獲物を惠比壽濱の事業場に置いて勇ましくはひつて來た。大津繪に唄はれた

「鮫浦の名所きかしやんせ、沖に蕪島辨財天、半崎に惠比壽濱、大崎さまより小舟渡物見石にて一杯たのしめや、はる

か向うに見ゆるはあれは松前あきあぢか但しや津輕の
傭船來る船が帆足をそろへてまんまんと蕪島かはして
錨を下せば鮫浦女郎衆は繁昌する」

は昔の鮫であつた。そして鮫の景色の表であつた。鮫の景色のすぐれたところは鮫の街を越えてからの海にあつた。岩にあつた。波にあつた。岩には芦毛石、見石、いたこまひまひ石、釜の口。波には日出の崎、鮫角、中須賀、大須賀、更に越えて白濱と深久保との間の、二階の岬、猿石崎、舘越崎などの岩の集團と海の色と浪の變化がすぐれてゐた。景色は野にもあつた。野には卯の花が咲き、玫瑰が咲き、外ケ濱百合が咲き濱菊が咲き、秋草が亂れて岩と波と海とに和して行つた。鮫の景色はこの草野と岩石とが相錯綜したところにすぐれた姿を見せた。濤聲はいつも野をめぐつてひゞいた。

野の中の物見石の下には競馬場があつた。近藤牧場があつた。馬はこの廣い草原の中に鬣をふるはしてゐた。海の窪みになつた惠比壽濱には東洋捕鯨株式會社の鮫事業場があつた。黑い煙を吐いてゐる煙突の下では、大きな長須鯨が日となく夜となく寸斷された。篝火が悽まじくもえてゐる時もあつた。長刀が夕日にきらめく時もあつた。血潮が浪を染めてゐる時もあつた。鯨の肉は罐詰にされた。肥料にされた。その工場が界隈どこにもあつた。そしてこれらの多くは此地方に散つて行つた。鹽藏された肉は遠く船が運んで行つた。鯨といふ海中の王者を見るために旅から集まつて來る人も多かつた。三月十五日に汐干をかねてこゝにある西の宮神社が賑はつた。

鮫の街を通りぬけるところに龜遊山浮木寺がある。もと島にあつた辨財天の像はこゝに麗はしい姿を置いた。島に近年更に勸請された祠には別な御神體を祀つた。寺のすぐ先から右の道は競馬場へ、左すれば惠比壽濱へ行かれた。左の道のわきにある半崎といふのは、昔臺場のあつたところであつた。野へも濱へもどの路をとつても行かれた。草野の間をたゞあるにまかした小徑をたどつてさへ行けば、何處までも何處までも行かれた。

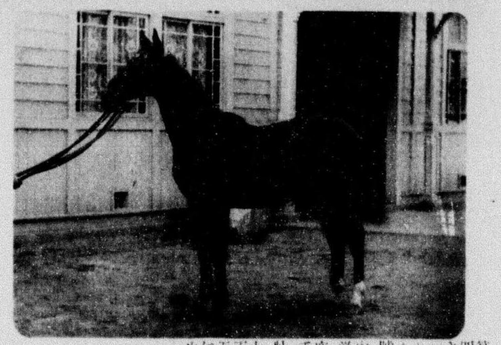
鮫の村は戸數六百人口四千三百を持つてゐた。そして鮫と常によんでゐるところから南へめぐつた海岸の白濱深久保種差、法師濱、大久喜、金濱などの部落から成つてゐた。野はその中にひろがつて蒼前平に連つてゐるのだつた。

鮫では釣ひ繩で魚を漁つた。それがよく發達してゐた鱈や鰈や鰤やあいなめや皆さうしてとつた。鮑は潛つてとつた。海膽はくぐつても釣繩でもとつた。章魚も多かつた。鰤や鮪や鮫やも船がついた。さがの赤い色と鰹の青い色とは色々な景色をその周圍につくつた。海草はこれかの海岸に多かつた。鮫では海苔を漉いた。刻昆布が出來た。花折昆布も海蘿も產した。

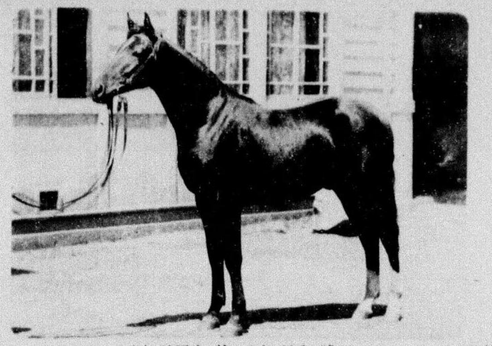
鮫角は青森縣の東の端であつた。そして鮫は鮫港道の行詰りであつた。昔は八戸への門戸、南部への門戸であつた。そこから一里三十町西に八戸の町があつた。白銀や

湊や小中野はその間をつなぐものであつた。これらを合して市政を布かうと唱ひられる程その距離は相接してゐた。經濟の上でも相接近してゐた。それが實現されるにしても、されぬにしても、八戸はこの海まで事實進んで來てゐた。誘致されてゐた。八戸には西から東へ多く風が吹いた。八戸は東へ東へとうつつて行つてこの行詰りから吹き返して來ることが、捲土重來することが將來すべきである、でなければ鮫の現在のやうに、それ自身の姿を誇るよりは途がないのであつた。更に新しく東へ通る道を通じて行くことも或はその一つの策であらう。其爲めに近頃八戸から海岸を傳はつて岩手縣の久慈に通じる久八鐵道を布き、岩手の東海岸の富を開拓しようとする議が唱へられだした。

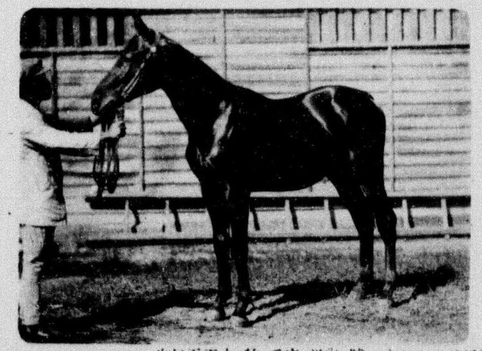
八戸の行く道はかうして開拓することか、鮫の海を立つて更に吹返して行くかの二つにあるらしかつた。



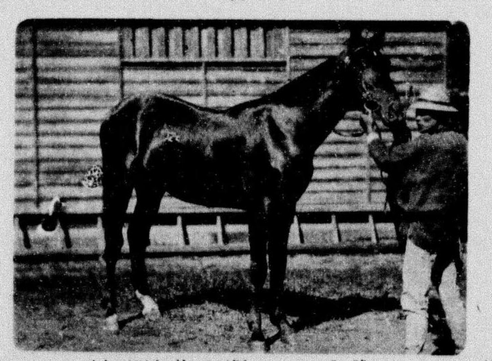
第四キセンゼイ號 内洋 毛鹿 牡 大正五年生
父 フサ號ーダンカシラ
母 濠洋 號ンイマルーゴ
八戸組 近藤元太郎



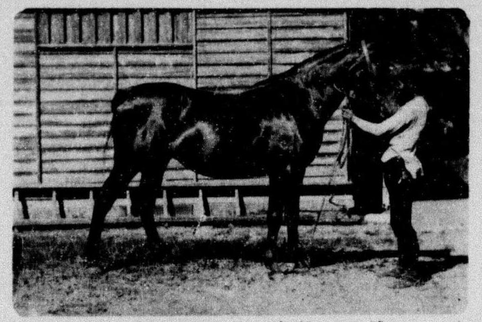
第二ルーチスドルーゴ號 内洋 毛鹿 牡 大正五年生
父 アラアーオ號六ノ五ンヤイバーオ
母 英洋 號ルーチスドルーゴ
八戸組 近藤元太郎



第二ソーシセインゼ號 内洋 毛鹿 牡 大正五年生
父 フサ號ーコーピムナーバ
母 濠洋 號ンイセシーソ
八戸組 田名部善太郎
外名一

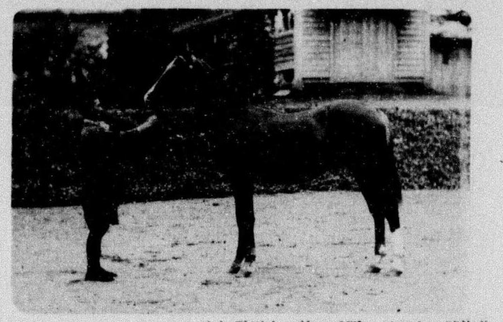


第二リマレプコ號 内 毛栗栃 牡 大正五年生
父 ニクハーレグ號トーノンコクーレグ
母 ニクハーコプレマリ號
八戸組 根城爲吉



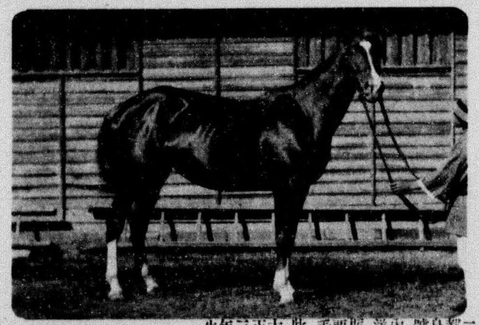
生年三正大 牝 毛鹿 雜プラア 號ドンハトイハホ
父 號ンカスキンジ二第・プラア
母 雜 號藤白

八戸組 藤井富次郎



生年五正大 牡 毛栗 洋 內 號海義
父 號鹿義 洋 內
母 洋 內 號海北二第

八戸組 福田耕一

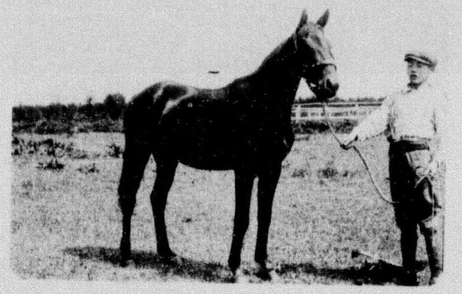


生年三正大 牝 毛栗 洋內 號鳥都二第
父 號ンロガ ラ サ
母 號鳥千機 洋 漆

八戸組 細越清之助

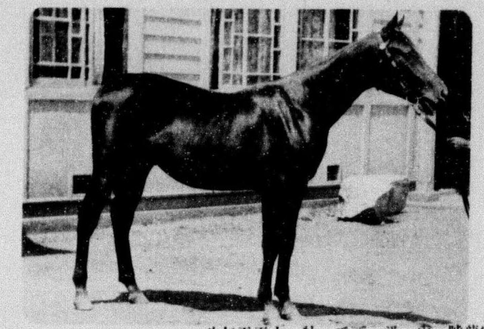
生年五正大 牡 毛鹿 雜プラア 號剛金二第
父 プラア オーバ ィヤンヤ五ノ六號
母 雜 號田浦

八戸組 上野昌治



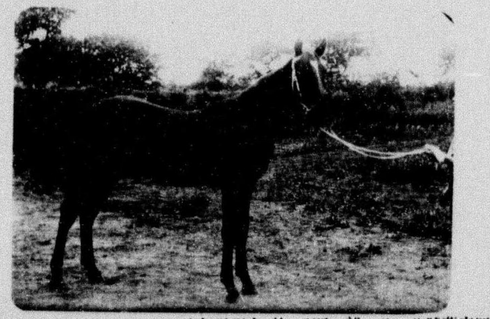
七戸組　濱中幾治郎

初櫻號　內洋　栗毛　牝　大正四年生
父　サラ　カシワ　ータ號
母　內洋　第一天ノ川號



八戸組田名彦右衛門

宇龍號　內洋　栗毛　牡　大正五年生
父　サラ　ワ　ルー號
母　內洋　ク　ンエ號



七戸組須藤重右衛門

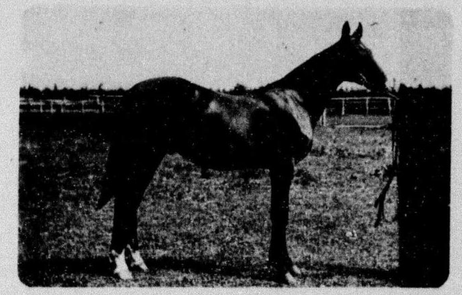
第四高藤號　サラ　雜　栗毛　牡　大正五年生
父　サラ　イ　ンフ　ーメ　ーシ　ョン號
母　アラ　雜　高藤號

七戸組須藤重右衛門

電光號　內洋　黑龍毛　牡　大正五年生
父　サラ　カシワ　ータ號
母　濠洋　小鼓號

七戸組　盛田德太郎

生年五正大　牡　毛鹿　洋　内　號玉寶
號ムーピーホ　ラ　サ　父
號零玉二第　洋　内　母

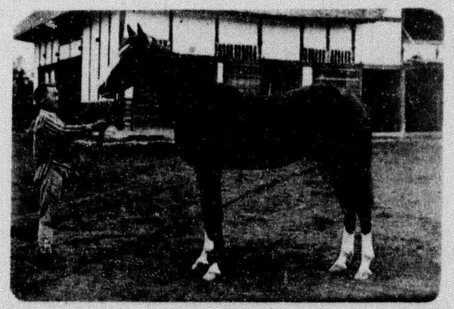


七戸組　濱中幾治郎

生年五正大　牡　毛鹿　洋内　號川ノ天五第
號シロガ　ラ　サ　父
號川ノ天　洋　内　母

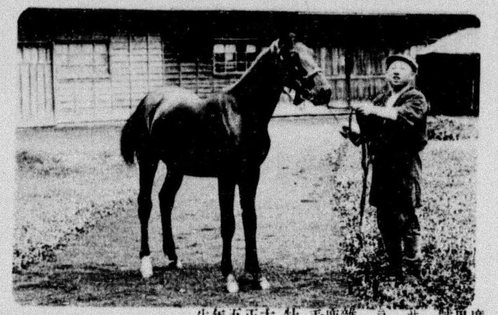
七戸組　盛田喜平治

生年四正大　牝　毛鹿　雜ラサ　號錦和大
號アンブエウドンモヤイダ　ラ　サ　父
號歳千　雜シロユシルベ　母



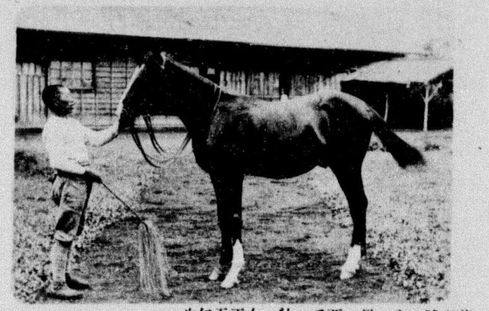
七戸組　盛田德太郎

生年四正大　牡　毛栗　洋　内　號錦玉
號シロガ　ラ　サ　父
號零玉二第　洋　内　母



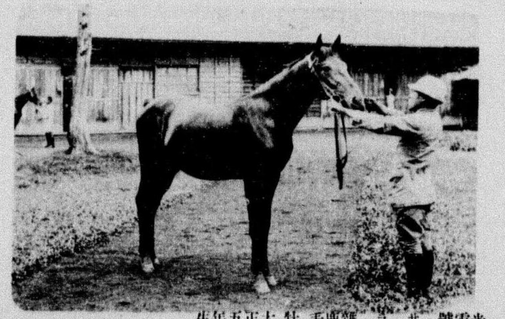
三木組　圓子廣治

生年五正大　牡　毛鹿雜　ラサ　號里廣
號ーダスレプトーコ　ラサ　父
號花里　雜　母



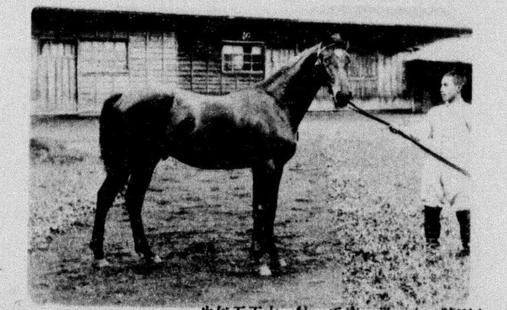
三木組　澁澤農場

生年五正大　牡　毛栗　洋內　號來蓬
號ンロガ　ラサ　父
號濱橫一第　洋內　母



三木組小笠原奥治

生年五正大　牡　毛鹿雜　ラサ　號雲光
號ンコシメーボフンイ　ラサ　父
號霞一第　雜　ラサ　母

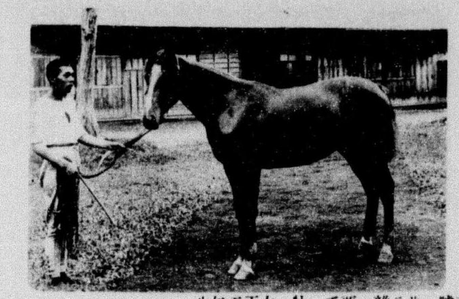


三木組小笠原奥治

生年五正大　牡　毛鹿　洋內　號剛金
號トーコルエジンア　ラサ　父
號ウユリンキ　洋內　母

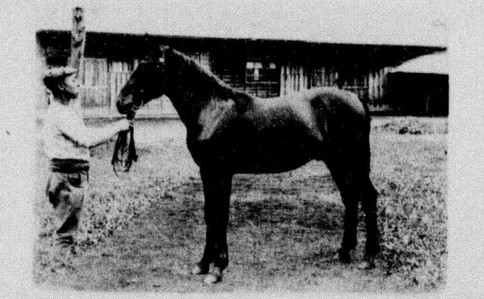
三本木組山本長太郎

大正五年生　牡　毛鹿　雜ノア　號森花
父　ア　ノ　ロバンス　號
母　雜　ノ　花房號



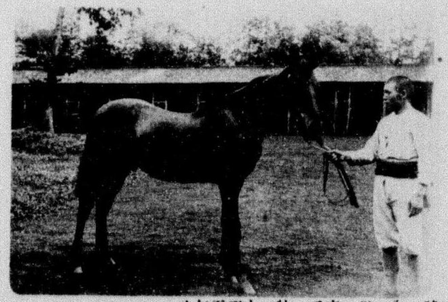
三本木組　力石幸作

大正五年生　牡　毛栗　雜ラサ　號吉日
父　サ　ラ　ジリアス　號
母　雜　春曉號



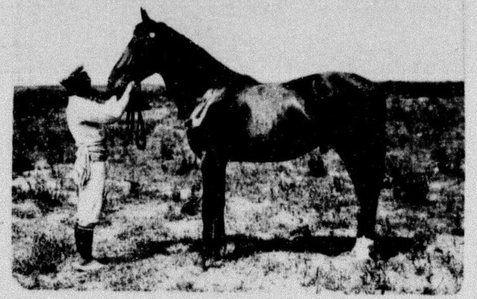
三本木組　漆畑　龜

大正五年生　牡　毛鹿　雜ノア　號屬軍
父　ア　ノ　エリオット　號
母　雜　千里號



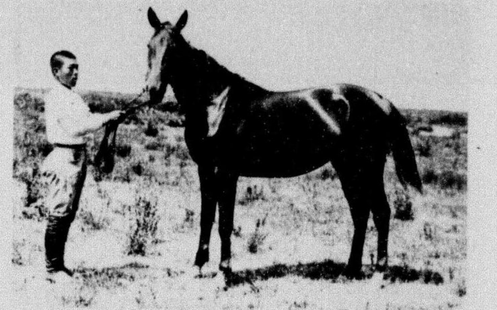
三本木組　廣澤牧場

大正五年生　牡　毛鹿　洋　內　號晴天
父　サ　ラ　シカタ　號ータ
母　洋　內　玉浦號



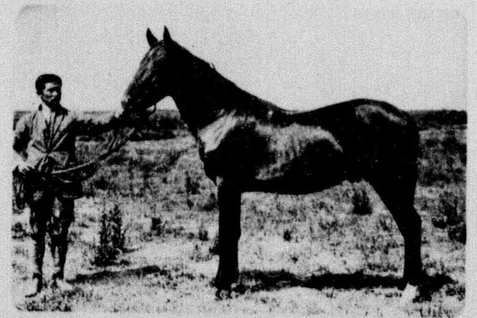
東津輕組　佐藤重藏

生年五正大　牡　毛鹿　洋内號　鐵
號ルーレスエヴ　ノ　ア　父
洋　濠　母



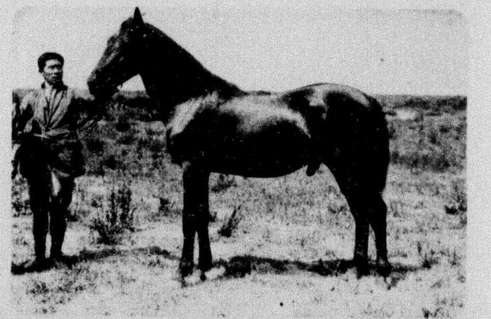
東津輕組小泉子之助

生年四正大　牝　毛栗栃　雜　號風松
號ーコーゼ　ムナーバ　父
雜回二　母



東津輕組　津川潔

生年五正大　牡　毛鹿　雜　號瀬岩
號ルーレスエヴ　ノ　ア　父
雜　母



東津輕組　葛西胖

生年五正大　牡　毛鹿　雜　號士富
號ルーレスエヴ　ノ　ア　父
雜　母

青森縣八戸町

八戸產馬畜產組合

電話六十六番

一弊舘は市の中央にして官公衙及諸會社
銀行等に近く至極御便利に候
一弊舘は建物高燥優美にして室内及食器
寝具も又優美清潔に候
一弊舘は調理に注意を注き膳部は常に新
鮮なる扇か浦の魚介を用ゐ候

陸奥八戸三日町
若松旅舘
舘主 若松與市
電話七三番
電略ワカ

洋酒罐詰食料品
洋物小間物化粧品 問屋
和洋紙茶 マッチ硝子

八戸三日町
工藤新助
電話一〇番
振替貯金四〇〇七番

特約品目
サッポロビール　金線サイダー
三ツ矢サイダー　蜂印香竄ブドウ酒
花人形ミルク　馬首印マッチ
花王石ケン　レート化粧料
美顔化粧料

特約專賣品

一灘大關正宗　一常盤サイダー
一舶來人形ミルク　一札幌金星ミルク
一菊世界葡萄酒　一ライオン印燐寸

和洋紙、洋酒、鑵詰、板硝子、鼻緒雜貨
各種帽子、洋小間物、服裝雜貨、卸商

西 博榮社

西塚商店

八戸町大字八日町八番地
電略 〇二シ
電話 二〇六番

賜

宮内省御買上

鼻緒、爪掛、麻裏、雪駄、表
塗下駄、萬履物附屬品

本南部産

桐、川、朴、
櫟、齒板
原料

（電氣畫附）（柾目彫）製造元

卸 西 履物部

八戸八日町本店ノ向
電略 〇二シハ
電話 二〇六

青森縣八戸町

八戸水力電氣株式會社

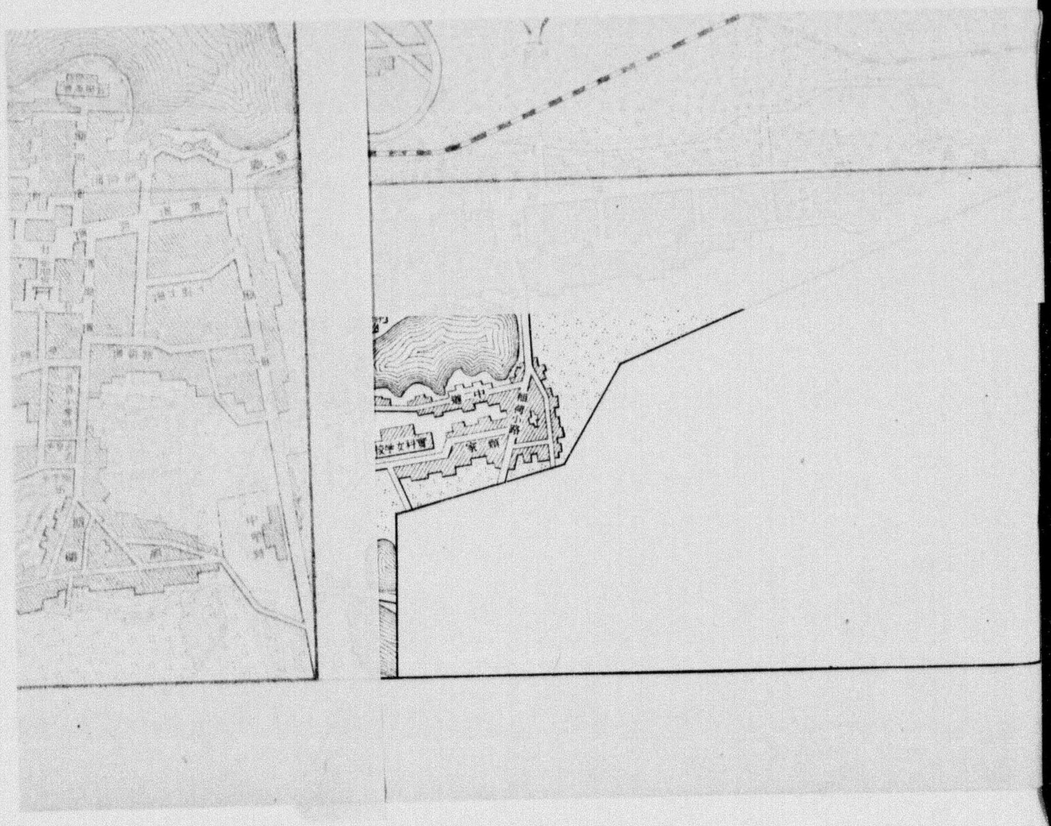
電話百五番

國產地織木綿製造
製綿業並ニ太物古着卸商
陸奥國八戸廿八日町
㊁西喜商店
電略(〇二)又ハ(二)
電話四十七番

八戸劇場
錦座
座主 西村喜助
電話四七番

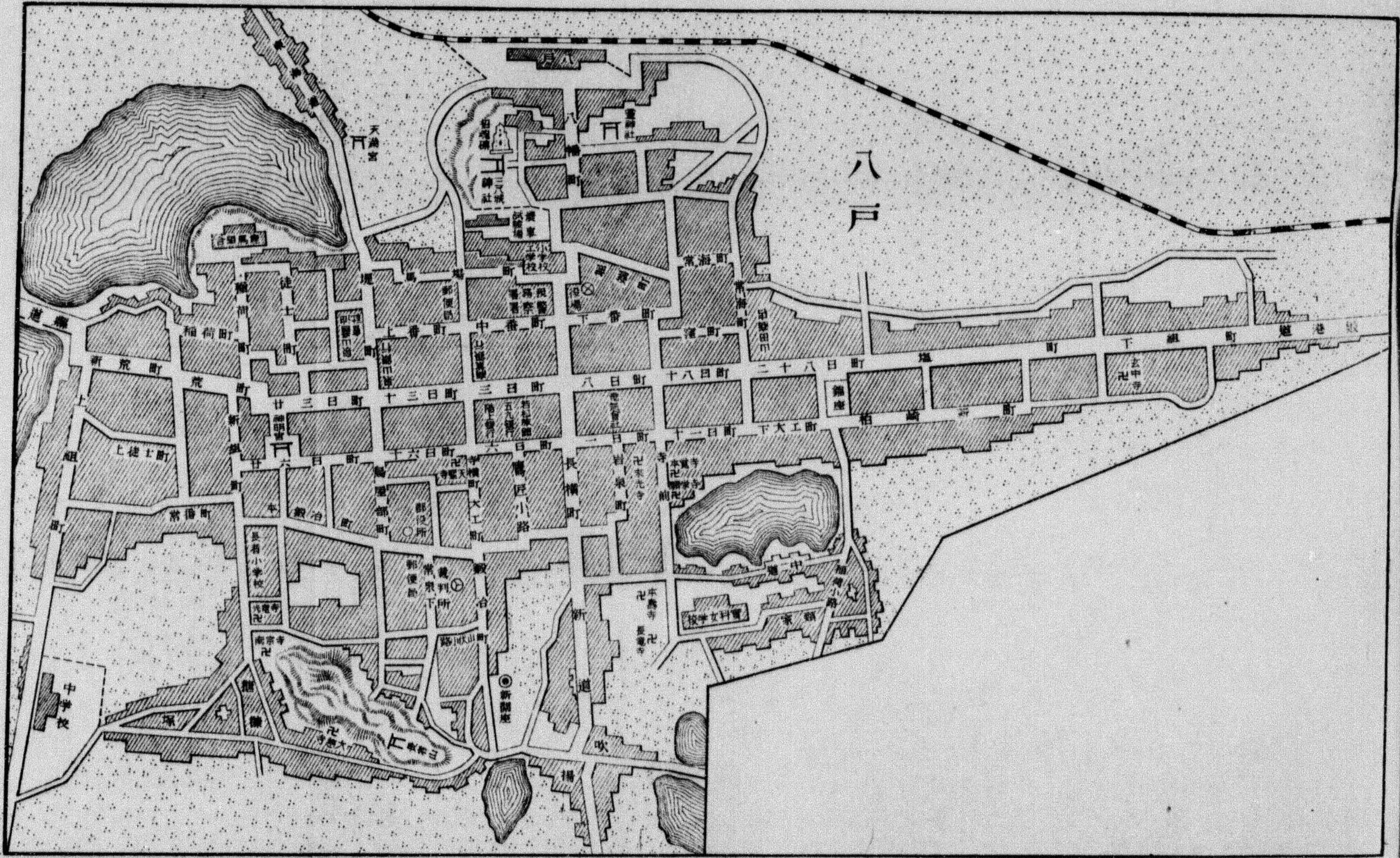
八戸町三日町
株式會社五十九銀行八戸支店
電話五九番

八戸町三日町
株式會社階上銀行
湊支店
電話一七番
五戸支店



八戸三日町
株式會社 八戸商業銀行
電話八番
湊支店
三本木支店
古間木支店

八戸十三日町
合名會社 泉山銀行
電話二四番
湊橋支店
劒吉支店

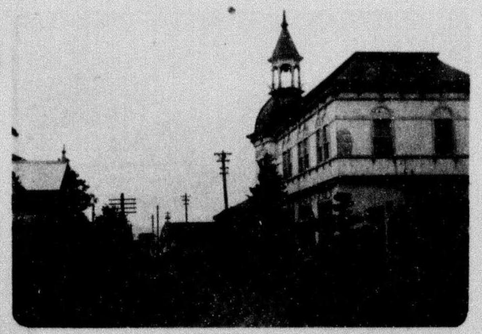


合名會社
泉山銀行

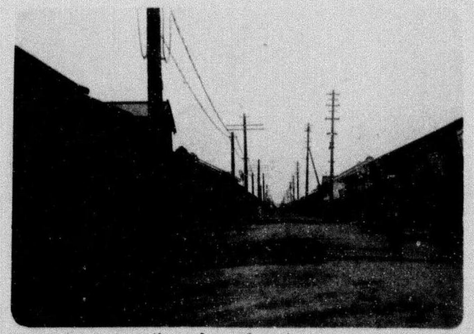
八戸十三日町
電話二四番

湊橋支店
劔吉支店
三本木支店
古間木支店

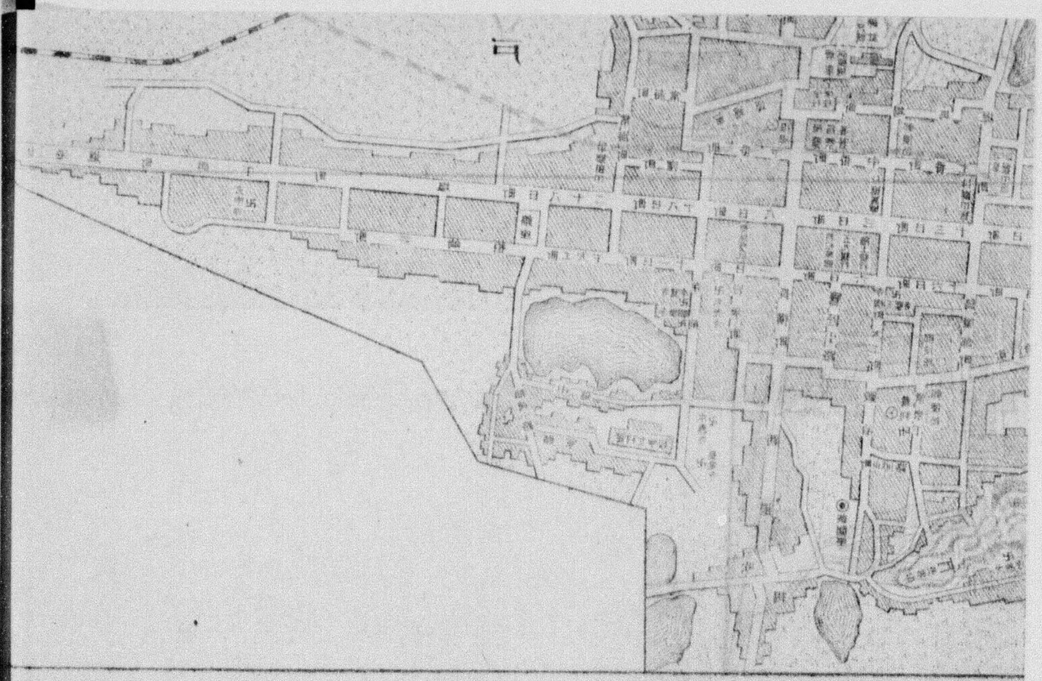
八戸町全景ノ一



八戸停車場通



八戸市街

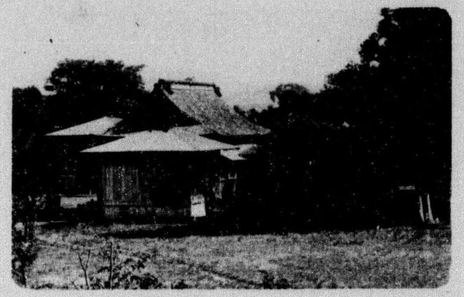


八戸町全景ノ二

三戸郡役所

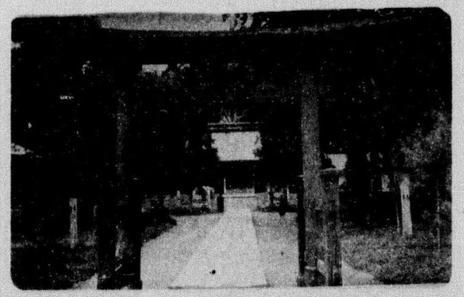
八戸區裁判所

長者町新羅神社



縣社三八城神社

社神明神



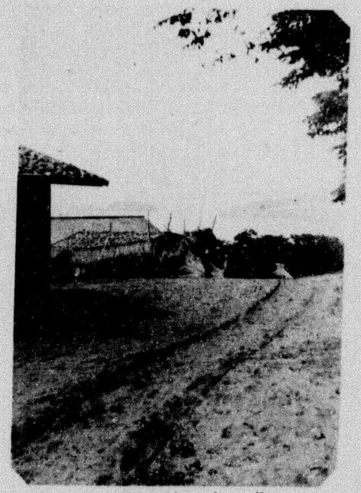
社神寵

法照山願榮寺(大谷派)

月溪山南宗寺(臨濟宗)

福聚山大慈寺(曹洞宗)

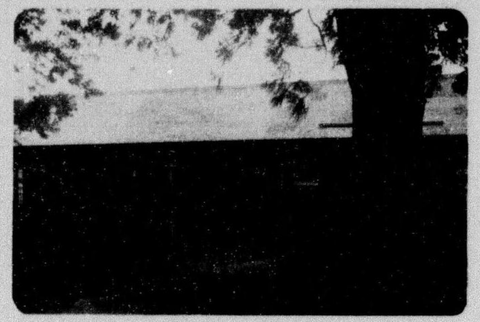
南宗寺藏物



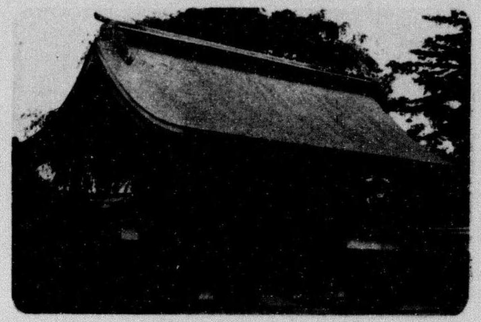
蕪島遠望

寺下五重塔

貴福山對泉院(曹洞宗)

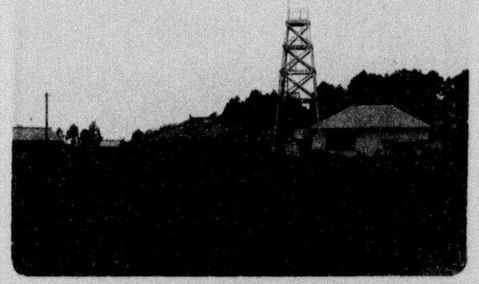


青森縣立八戸中學校



舊八戸藩主南部子爵邸

上り街道（並木）

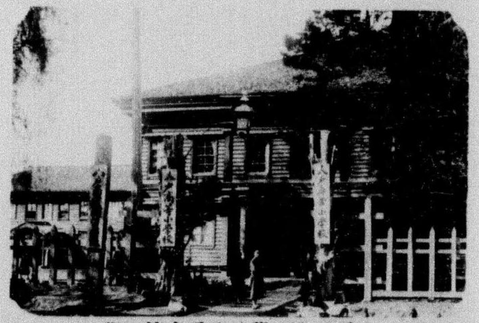


青森縣農事試驗場八戸分場

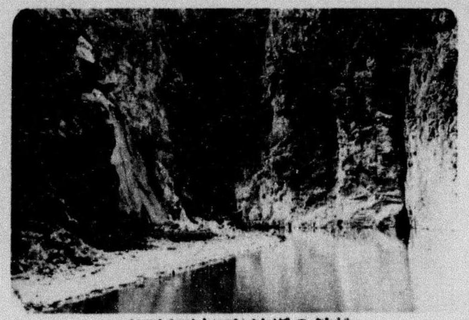
長者尋常小學校

青森縣立實科高等女學校

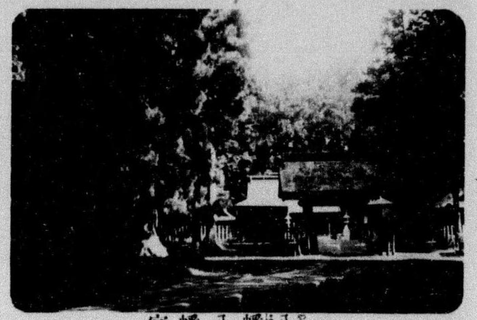
八戸郵便局



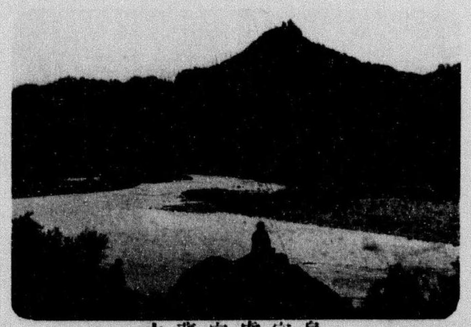
八戸尋常小學校八戸高等小學校



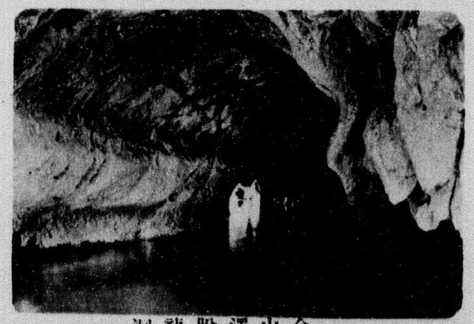
松舘の溪流（石灰石採掘）



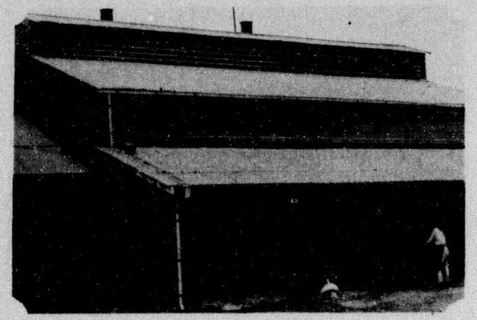
八幡宮



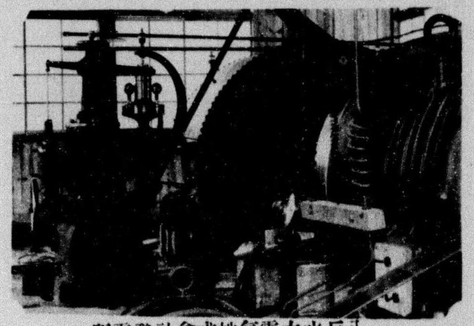
山藏空虛守島



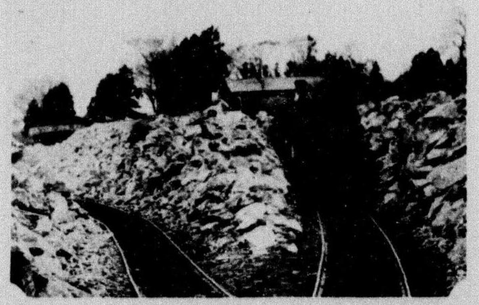
金山澤脫龍洞



八戸セメント工場

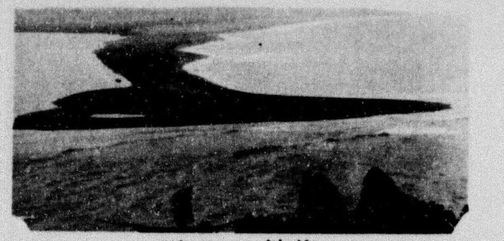


八戸水力電氣株式會社發電所



石灰石運搬

東洋捕鯨株式會社鮫事業場



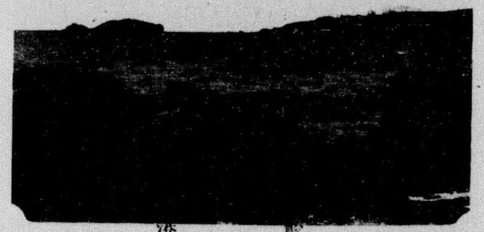
湊川口の崎

小中野新地(遊廓)

湊立鼻

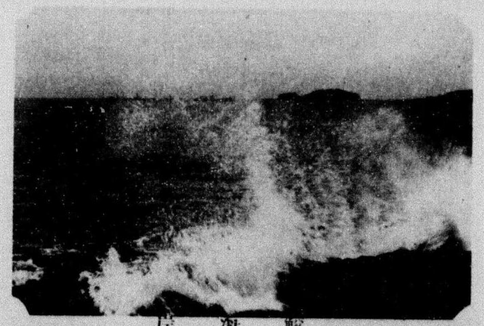
湊橋

白銀海水浴

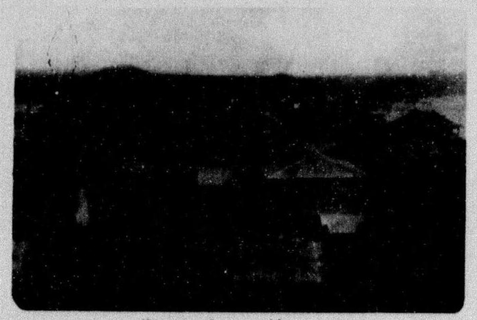


港　　鰹

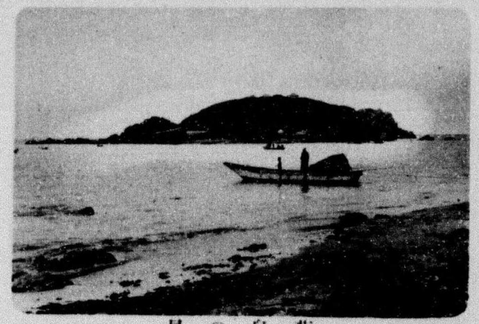
白銀海岸地引網



岸　海　鰹



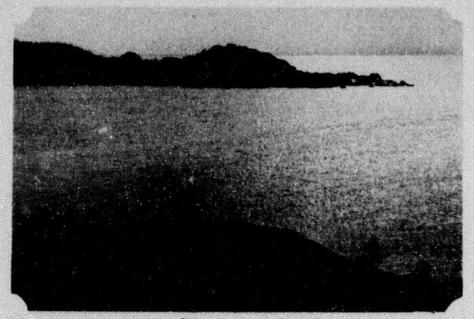
鮫市街



無島の景

深久保の海

猿石崎



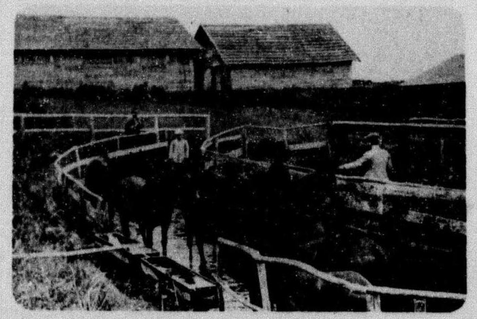
燕島の夕照

燕島の鵰群

鮫天女ヶ窪競馬場

鮫港淀泊中の捕鯨船

近藤鮫牧場放牧地



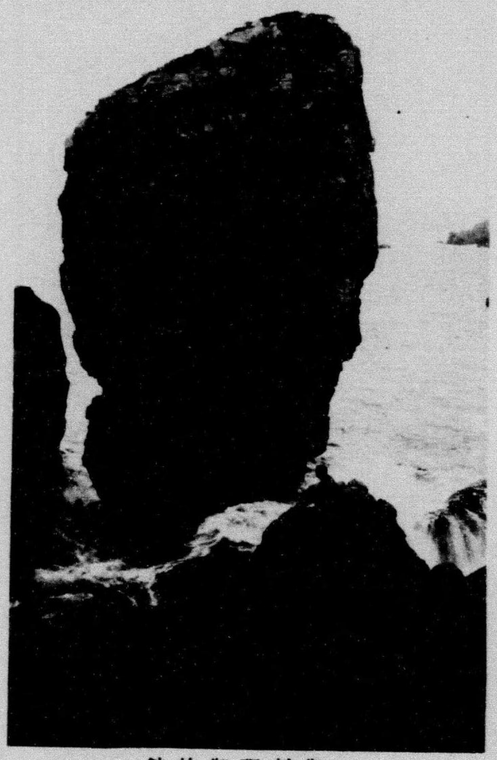
近藤牧場鮫厩舎

近藤牧場八戸厩舎

八戸三社大祭（武者押）

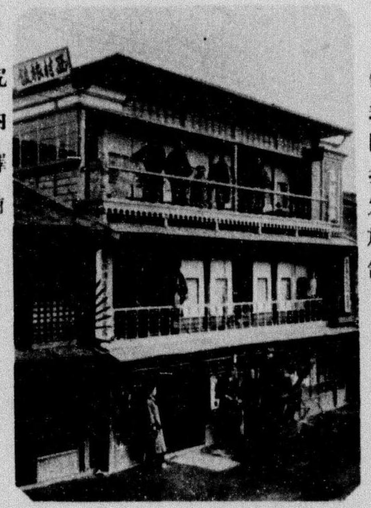
八戸豊年祭（ゑんぶり）

八戸三社大祭



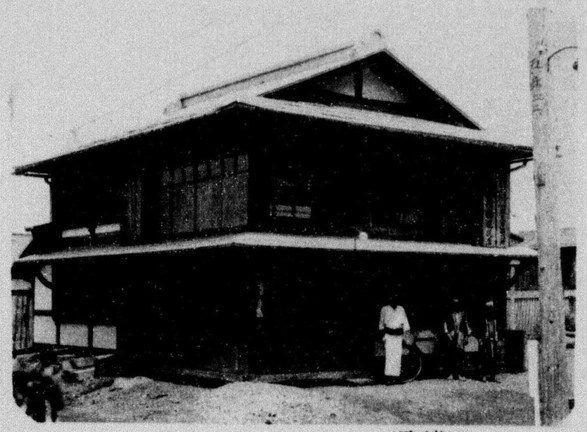
御料理御旅館
鮫港　石田家　電話一番

尻内驛前



西村旅館

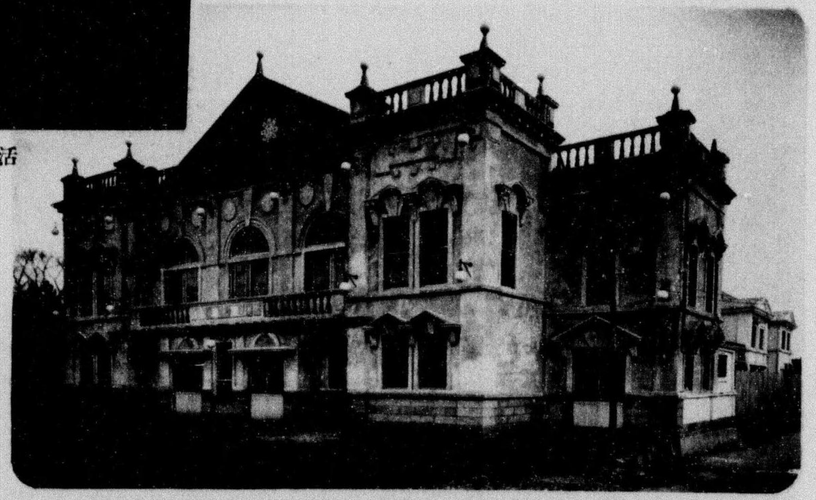
鐵道院指定旅館



三菱鐵道
石灰石貨物
取扱　高橋吉太郎

八戸停車場前　電話三〇番

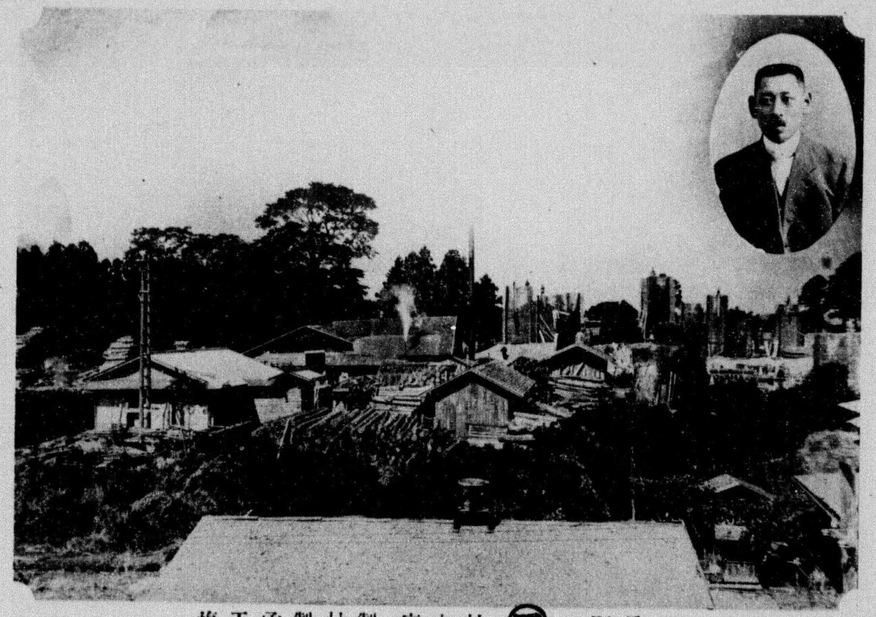
活動常設館　新開座



八戸劇場　錦座

場主　村井福次郎

八戸　村井製材所

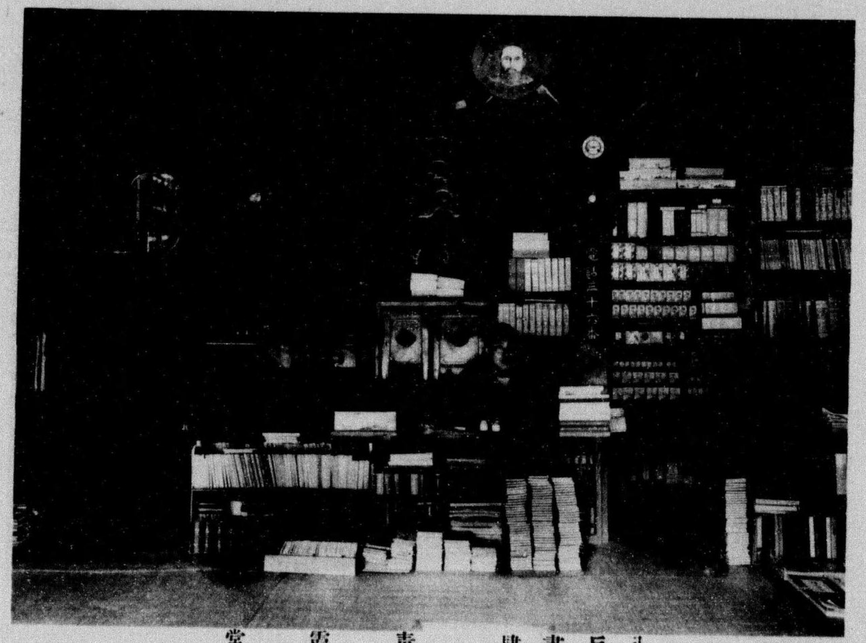


主人　西村春秋

八戸町　西　材木店　製材製函工場

八戸十三日町　三浦呉服店　電話七十二番

八戸三日町　坂本源兵衛藥店電話一〇八番



八戸書肆　青霞堂

はちのへ新聞社
社長 北村益
本社 八戸長横町二
電話七十六番

八戸印刷株式會社
社長 浦山十五郎
本社 八戸長横町二
電話七十六番

奥南新報社

社長 小山田定彌

本社 八戸町七番

電話 八戸町番

八戸實業時報社

社長 小野寺新

本社 八戸町寺横町

TRADE MARK 文

和洋紙
和洋酒
罐詰類
鼻緒類
雜貨商

卸小賣

近藤文五郎商店

八戸十三日町

電話百〇二番

金物類 卸
鼻緒爪掛
洋釘 小
小間物 賣

陸奥國八戸十三日町

加 大橋兼八

振替口座東京一九八五七番

陸奥八戸三日町
〈の 關野洋服店
電略（ノ一）
電話六五番

陸奥八戸三日町
杉本旅館
館主 杉本兵助
電話百四拾四番

陸奥八戸三日町
㊀ 橋本源藏本店
振替貯金東京壹貳七四五番
電話百參拾五番
電略（ハシゲン）

綿太郎
糸物商
陸奥八戸十三日町
㊀ 橋源吳服店
電話百四拾八番

蒙宮内省御買上之榮
最上醬油
センザン印

元 醸造
陸奥八戸本徒士町
泉山醬油合名會社
電話二七番

青森縣八戸線湊驛前

秋田木材株式會社 湊出張所

電略（アミ）

電話壹五參番

和洋酒食料品商

陸奥八戸十六日町角

仙及川商店

仙臺屋

電話百七十一番

電略（オイセ）

洋酒罐詰
密柑甘藷
落花生
各國果物

卸商

青森縣八戸十八日町

仙及川萬治商店

電話二百十一番

電略（マン）

日本石油特約店

砂糖石油麥粉 卸小賣商

罐詰洋釘水飴

硝子板線香種々

和洋酒ロープ繩

鼻緒爪皮下駄草履

上清水與助

陸奥八戸寺横町

電略（シヨ）

電話二〇八番

最上醬油味噌

白麹製造販賣

陸奥國八戸十六日町

加印醬油釀造元 加藤醬油店

吳服太物古着
陸軍拂下毛布
其他皮具種々

陸奥八戸廿八日町錦座向
卸小賣商 **杉本商店**
電略（スキ）又ハ（ヌ）

陸奥八戸長横町
木材製函商 **金古里政吉**
電略（フサ）

內國通運株式會社取引店
三立社八戸代理店

陸奥國八戸停車場前
角谷運送店
電話一三番

同八戸六日町
角谷出張所
電話五七番

內國通運株式會社取引店

陸奥國湊停車場前
角谷運送店出張所
電話二〇一番

明治運送株式會社取引店
日本運送株式會社取引店
原鐵運送取引店

陸奥國八戸停車場前
近江屋運送店
電話一八番（電略オ）

陸奥國湊停車場前
近江屋運送店支店

東北本線古間木停車場前
近江屋運送店支店

空壜、襤褸、屑物、鷄卵

青森縣上北郡三本木町
問屋 氣田商店

別製 加 最上醬油

八戸町大字六日町

醸造元 加 阿部嘉十郎

商號 小田嘉

電話 二〇五番

砂糖石油麥粉
小間物紙荒物
機械麺類製造
木炭輸出商

陸奥八戸廿八日町

大 伊東宗吉

電略(イト)又八(イ)
電話 百拾貳番

各種魚肥料製造販賣
海陸物産委托販賣
海産物製造販賣
鑵詰類製造販賣
魚油賣買

青森縣三戸郡湊村大字濱通り字下條十六番地

商標 肥

八戸肥料株式會社

社長 長谷川藤次郎

電話 四二番
電略(八ヒ)又八(八)

各種漁業
海産物製造販賣
漁業用綿糸及綿糸網製造販賣

青森縣三戸郡湊村大字濱通り

登錄商標 竹 長谷川藤次郎

電話 六三番
電話(ハセト)又八(八)

漁業並ニ魚粕魚油賣買

北海道釧路港字頓化二十一番地

登錄商標 竹 長谷川漁撈部

出張事務所

電話 三〇二番
電略(クハ)又八(八)

陸奥八戸八日町

㊟ 小笠原啓藏商店

振替東京一〇二五六番
電略（ヲケイ）又ハ（ヲ）

雜貨部　木炭部
電略（ヲサ）　電略（ヲモ）

木材部　委托部
電略（ヲ）　電略（ヲイ）

東北本線八戸驛前

㊟ 小笠原運送部

電略（ヲウ）

吳服太物漁網漁具
燐酸肥料和洋酒類
鑵詰類　日用雜貨
八戸名所繪はがき

野里本店
湊村白銀清水川

野里支店
湊村白銀三島下

店主　野里恒吉

海水浴旅館　三島館

誠實勤勉
風光明媚
魚介新鮮
衞生無比

主　野里みや

電話百〇六番

奥州土竈木炭
角俵六貫目造
元粗木炭問屋

青森縣八戸停車場前

二 植村彦太郎

電話百五十七番
電略（ウエ）又（ウ）

木材
木炭　商

青森縣三戸郡湊

黑澤支店

電話壹壹九番
電略（クロサ）又（ク）

三戸郡湊驛前

黑澤製材所

御料理
海水浴
御旅館

橋本館

鮫港

海産物
鮮魚
木炭輸出

陸奥湊驛通リ

島川商店出張所

電略（シマ）又ハ（シ）

東北八戸線湊驛前

鐵道貨物取扱

三丸三合名運輸部

電略（〇三）又ハ（三）
電話呼出一五五番

小中野藝妓

小今好柳
仲吉あや子
陸奥子松奴
小松音丸
小光濱次
糸司雛助
宮司三吉
花子幾千代
ノ太金時
梅奴よし龍
鷹子八千代
權兵衛福丸
まねぎ豆八

小今　今もむかしの名をそのまゝに
色の湊の思案ばし

糸司

切れた二の糸
織ぎや三の糸
じれたその間を時鳥

幾代千　幾千代かはらぬ
松の葉さへも
泣てこぼれる人知ず

花子

花にとゞかぬ
思ひを寄せて
とゞかぬ恨みを小夜嵐

鮫港藝妓

市小清榮小仲德花

松染司吉高吉平勝

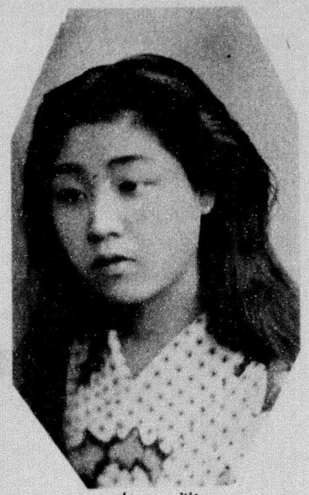
八戸名所繪はがき　一枚　金壹錢五厘
八枚袋入　金拾錢
十六枚入　金貳拾錢

三戸郡實業銘鑑　定價金貳拾錢

向鶴　定價金參拾錢

青森縣名勝案内誌　定價金四拾五錢

八戸書肆
發行所　青霞堂
青霞堂支店



濱次

いふにいはれず
嬲るがまゝに
任した濱ぢのみだれ髪

よし龍

切れりやなほよし
龍の字凧の
雲に乘りたい身の願ひ

鷹子

なびきながらも
鷹の羽すゝき
染める露さへ陰日向

仲吉

なかなか吉左右
わからぬ首尾を
逢へぬと諦らめ寢る辛氣

陸奥子

ながなが積つた
思ひの雪の
とけて嬉しい陸奥の春

梅奴

誘はれごゝろに
咲く室の梅
奴さそひの文使ひ

松奴

糸にひかれて
行つたり來たり
色よい風まつ奴凧

風が風鈴ふく丸窓を
しめた二人の影法師

福丸

此世で添はれにや
あれ天の川
飛んで八千代を契り星

八千代

首尾を案じて待てや
鐘の音
丸く出られぬ二十日月

音丸

まねぎながらも
柳の枝のあちら
こちらと風次第

まねぎ

願ふ身はまめ
八幡菩薩
主が御無事で御座るやう

豆八

待つ夜焦れて
身は螢かも
蚊帳に寝て見つ起てみつ

小光

小松

門に並んで
添ふ日を待つて
意地を小松の立るやら

雲雀可愛や
権兵衛が蒔いた
色の種から浮名立て

権兵衛

好柳

歸るかりがね
みなすき好み
柳にや燕が來てなぶる

あやこ

綾や錦を着る
勤めより
たすきあやどる
身のねがひ

三吉がひいてひかれて
染分手綱
親御戀しの
鈴が鳴る

三吉

時

金と時とを心のまゝに
主と二人で暮したい

奥州二の宮
じまんぢやないが
私のみさほの
守り神

宮司

太夫

待つ夜欺すに
水鶏がまたも
しめた裏木戸來て敲く

雛助

並べる京雛
すけ手の主と
ならば添へたい桃さくら

八戸名花

八戸名花

鮫港藝妓

（いろは順）

市松

染めたこゝろの
市松障子
どちへまことが
うつるやら

花勝

俯むけやよい花
勝氣を見せて
風にもまるゝ濱の百合

徳平

とくに解かれず
くせつにそれて
べちな枕にいその波

仲吉

意地で添ふ氣の
その二人仲
吉と御簾に出て欲しい

小染

●●染めたつもりの桔梗の露が
いつか染まつた濃むらさき

荒海の波も高根に積むあの雪も
とかす情の春の風

小・高

榮吉

●えぞへ行く舟いかりをまいて
●きしる櫓櫂にちのなみだ

濁り水から出た蓮葉の
●●清しにごらぬ露の玉

清司

鴎　の　島

鴎　の　島

陸奥國八戸新荒町

玉

米雜穀
肥料商

瀧澤商店

電略（タキ）又ハ（タ）
電話七十五番

陸奥國八戸新荒町

雜貨
卸商

三井商店

電略（三井）又ハ（三）
電話一二五番

陸奥國八戸二十八日町

精米
雜穀商

田名部定雄

電略（タナブ）

陸奥國八戸二十八日町

和洋小間物
和洋酒類
食用鑵詰
砂糖
石油

三浦庄七

電話四十五番
電略（ミウラ）又ハ（ミ）

小間物商 陸奥八戸廿三日町
五 工藤傳三郎

履物鼻緒問屋 陸奥八戸二十三日町
水履原料
イ 武内德助
電話百拾八番

賣藥化粧品
袋物雜貨
帽子學用品
陸奥八戸十三日町
高善商店
電略（タ）又ハ（タカ）

鰹節煮干
田作〃柏
製造業
陸奥湊柳町
神田重雄
電略（カミ）又ハ（カ）

桐材木取問
甲良履物
種類網羽屋
陸奥八戸鍛冶町
立原商店
電略（タチ）

和洋小
間物卸
陸奥八戸二十三日町
松本萬吉
電話一二九番

銘酒
加茂川
本舗
陸奥八戸十三日町
大塚屋中村秀三
電話一五二番

馬ノ肥ルクスリ大販賣
藥種賣藥
度量衡器
馬具類
加藤能萬堂
八戸十三日町

履物
卸商
陸奥八戸十三日町
橋文商店

漆器陶磁器
鑄物雜貨類
卸商
店稱花龜商店
小瀨川友三郎
青森縣八戸十三日町

海産物
肥料類
海草類
煮干
鰹節
田作
陸奥八戸六日町
長谷春松
電話壹六番
電略（八セ）
蒲鉾製造

良い品を安く賣るは
八戸十三日町の
能貞吳服店
電話一六七番なり

萬小間物雜貨
新流行玩具類
砂糖類和洋菓子
卸小賣商
陸奥八戸二十八日町廿三番地
伊勢崎商店
電信略號（イセ）又ハ（イ）
店主 伊勢崎亥八郎

茶紙
茶器
商
陸奥國八戸十三日町
小森榮吉

陶器
卸商
陸奥八戸三日町
小森只藏
振替東京五四九七番

紐育スタンダード石油會社代理店
共濟生命保險株式會社代理店
砂糖
和洋酒
疊表類
石油
楢舘商店
陸奥八戸八日町
電話三二番

陸奥八戸岩泉町
酒造業 楢館彌三郎
電話 一二〇番
電略（ナラヤ）

青森縣八戸町
煙草元賣捌人 楢館彌三郎
支店 三戸町 久慈町

陸奥八戸廿八日町角
各國陶磁器
洋燈硝子板 卸商 石甚商店
下モ見世正札陳列 小賣部
電話 百〇一番

八戸十八日町
砂糖麥粉
米雜穀商 山本勝次郎
電略（ヤマカツ）又ハ（ヤマ）
電話 五番

和洋酒罐詰
鳳凰印サイダー
朝日印ラムネ
金蟻葡萄酒
銘酒白鹿
蜜柑落花生
飲料水製造販賣元
陸奥八戸朔日町
春 石村春松
電話 百〇四番
電略（イシ）又ハ（イ）

東洋捕鯨株式會社製鹽藏肉販賣店
陸奥八戸三日町
モ 海產物 鹽乾物 商 槻館門藏商店
電話 二十八番
電略（ツキ）又ハ（ツ）

八戸製カーバイト特約
寶田石油特約店
陸奥八戸町寺横町
和洋小間物
雜貨卸商 高橋常太郎本店
電話 貳〇參番

洋物雜貨
陶器卸商 八戸三日町 關重本店

日用雜貨
荒物和洋
菓子卸商

陸奥八戸三日町

工藤辰四郎

振替東京壹九壹五番
電略（クトウ）

八戸三日町

理髮アーテスト

岩崎調髮館

銘酒
稻の友
三陸正宗
味淋白酒

發賣元

陸奥國八戸堀端町三番地

横澤新太郎

振替貯金口座第九壹貳番
電話二十九番電略（ヨコ）

米穀肥料
雜貨石灰

商

陸奥八戸新荒町

橋本磯五郎

電話百六十番
電略（イソ）又ハ（イ）

米雜穀肥料
鹽元賣捌人
精米業

陸奥八戸荒町

鳥谷部直太郎

電話三十八番
電略（トリヤベ）又ハ（ト）

米雜穀
肥料商

陸奥國八戸町

下斗米此吉

電話一〇九番
電略（シモ）

陸奥國八戸驛前
三鱗合資會社取引店

八戸運輸店

電話一四二番
電略（ハセ）又ハ（セ）

製函
木材業

陸奥國湊驛新町

音喜多吉三郎

電略（オト）

米穀肥料
食鹽味噌
陸奥國三戸郡湊新町
大久保善三郎
電略（オクボ又ハ（オ））
電話四十四番

木炭問屋
米穀海產商
陸奥湊驛前
中田商店
電略（〇ト）又ハ（ナ）
振替東京二六七九三
電話百五十五番

賜
宮內省御買上ノ光榮
閑院宮家御買上ノ光榮
青森縣三戸郡八戸湊本町
銘酒
千歲正宗
陸奥男山
釀造元
駒井庄三郎
電略（コマ）電話百拾壹番
振替東京二六〇七六番

販賣所
八戸荒町角
駒井支店
電話二一四番

御調菓子
進所
陸奥八戸二十八日町
山乃屋號
名物甘なつとう
外下北檜長柾九寸柾
馬鈴薯仲買商
山田大次郎

八戸番町
井河醫院
院主 井河德壽
電話三八番

大藏省
免許
青森縣八戸町大字番町參拾貳番地
八戸無盡合資會社
電話二一七番

海產物商
青森縣三戸郡湊村
吉田第吉
電略（ヨシタ）（ヨ）電話五壹番
振替貯金口座東京五五壹壹番

吳服太物
古着卸小賣
陸奥八戸廿三日町
商小野寺梅次郎
電略（オノ）又ハ（ウメ）

陸奥八戸町
諸機械製作所 安 坂本鐵工場
電略（サカ）

陸奥八戸下大工町
工藤製材所
電略（クトウ）又ハ（ク）

閑院宮殿下御嘉納ノ光榮ヲ賜フ
全國菓子博覽會共進會品評會賞牌多數收領
大日本元祖名物菊菓子製造本舗
村福號
和洋菓子製造元 清馨堂 石橋雄太郎
八戸十三日町

陸奥八戸番町
旅館 東成館
館主 大久保藤松

米穀 王 肥料
青森縣八戸新荒町
電話壹六五番
丸王商店

正札現金かけ直なし
誠實勉強弊店特色
丸 河村榮吉質店
陸奥八戸湊新町壹番地
吳服太物雜貨商

米雜穀 肥料商
陸奥八戸新荒町
電話二十二番
電略（オノ）又ハ（オ）
大野直太郎

工藤製材所
青森縣八戸町常泉下

陸奥八戸町三日町
泉山吳服店
電略(イ) 電話二十一番

小中野新町
小間物化粧品販賣
浦與商店

乾物青物果物
和洋食料品各種
たばこ鹽小賣
陸奥八戸町三日町
八百定 村本定吉
電話一一五番
電略(ヤヲサタ)

滿洲本溪湖守備隊
浦山三千彦

八戸中番町
村田齒科醫院
電話百十六番

のみとり粉
各種種物
苗木盆栽
八戸十六日町
小井川種苗店

度量衡販賣所
衡器修覆所
八戸三日町
書肆 青霞堂

カーバイト

株式會社大光商會

八戸カーバイト工場

八戸町大字吹上

八戸二十八日町

通稱甲文

山田商店

呉服部

醤油部

電話三七番

日本石油株式會社
大日本麥酒株式會社
大阪銘酒金露
關東酸曹肥料
特約店

砂糖石油輕油礦油
和洋酒罐詰肥料
商

青森縣八戸町大字廿三日町
日本生命保險代理店
横濱火災保險代理店
石萬商店
電話三十三番

青森縣八戸町大字八日町
有隣生命保險代理店
鹽烟草小賣店
石萬支店
電話六十一番

小中野、左比代
萬葉亭
電話五十三番
同新地
萬葉亭支店

改良 月松正宗
銘酒千歳
燒酎壜詰
姫印サイダー
札幌ビール

八戸三日町
近江屋 松橋宗吉
振替東京一七八〇六 電話百拾參番 電略(マツ)又ハ(マ)

銘酒 末廣釀造元
同 二十六日町
松橋第二酒造場
(電話百六十四番)

萬小間物化粧品商
八戸鍛冶町
青善商店
店主 青村善太郎
四季教育流行子物 玩具卸
名産 木馬 貝細工販賣部
はちのへ

例年の通九月
一日
二日
三日

三日間 新羅神社 寵神社 神明宮 三社大祭

執行候事

八戸長者山

八月 三社御祭禮事務所

陸奥八戸湊

浪打旅館

電話一一番

同 湊新町

同支店

弊館は營業上百般の改善を加へ且つ懇切叮嚀に御取扱ひ御便利を旨とし一層大勉強仕候間倍舊の御愛顧御引立の程伏して奉希候也

牛馬專門藥

散劑 内羅藥

牛馬專門藥

外用 獸液

發賣元 陸奥國八戸町

明治藥館

電話百五十四番 振替東京二二六六番

八戸停車場通り

江渡旅館

館主 和田 ト ロ

電話 五十四番

八戸停車場通り

誠實
勉强

佐藤旅館

客室清潔取扱懇切可申

四八

監査役 淵石畑藤八小沼白

監査役 澤橋中崎重笠館井

取締役 畑原

常務取締役 由定定由富助惠哲

社長 松雄吉藏男藏吉夫

資本金壹萬圓

明治卅三年創業

大小松竹川松大清泉

近笠橋花原橋野水常

下原東兼

大源正芳一喜太三

浦藏一春郎一郎郎吉

八戸印刷株式會社

斗竹古大中竹市中山泉

岡岸平島村川居下田

島熊伊武德本市

山太三夫輝新倉太

十郎郎郎郎巖一藏藏郎

米多勝五

文賀

嘉五

藏郎吉三郎

支配人 會計部長 工場部長 編輯部長 印刷部長 植字部長 石版部長

古藤高東奈河石

平田坂條須原橋

友鐵川木福

夫專五太葆宗太

郎松郎郎光治郎

四九

露光量違いの為重複撮影

大正六年八月五日印刷
大正六年八月十日發行

（定價金五拾錢）

編者　青森縣三戸郡八戸町大字三日町九番戸　浦山十五郎
發行者　青森縣三戸郡八戸町大字三日町九番戸　浦山政吉
寫眞撮影者　青森縣三戸郡八戸町大字三日町九番戸　浦山邦二
印刷者　東京市神田區南乘物町十五番地　葛西虎次郎
印刷所　東京市神田今川橋　青雲堂印刷所

發行所
八戸三日町
八戸廿八日町　青霞堂
青霞堂支店

販賣所

小中野　浦與商店
同　片岸商店
湊本町　波岡商店
白銀　野里商店
同　田村商店
鮫港　福島商店

泉

市内の御方様

御入用品は是非三萬へ御下命奉願上候

御急ぎの御用品は何なりとも電話七十二番へ御申付被下度早速メッセンジヤボーイを以て御宅へ届け申し上げ度く半衫一揃手拭壹本たりとも御遠慮なく御用命下さる樣希ひ上げ奉る

地方の御方様

御来八戸の節は是非御立寄被成下度候

流行珍柄品は申迄も此の上なく贅擇品高貴品又日用かくべからざる實用品に富む事ご意匠ご注文ご相談ひ可申候

泉

八戸十三日町　三萬呉服店

泉

泉

露光量違いの為重複撮影

大正六年八月五日印刷
大正六年八月十日發行

《定價金五拾錢》

編者　青森縣三戸郡八戸町大字三日町九番戸　浦山十五郎
發行者　青森縣三戸郡八戸町大字三日町九番戸　浦山政吉
寫眞撮影者　青森縣三戸郡八戸町大字三日町九番戸　浦山邦二
印刷者　東京市神田區南乘物町十五番地　葛西虎次郎
印刷所　東京市神田今川橋　青雲堂印刷所

發行所
八戸三日町
八戸廿八日町　青霞堂
青霞堂支店

販賣所
小中野　浦與商店
同　片岸商店
湊本町　波岡商店
白銀　野里商店
同　田村商店
鮫港　福島商店

177
967

市内の御方様
御入用品は是非三萬へ
御下命奉願上候

御急ぎの御用品は何なりとも電話七十二番へ御申付け被成下度早速メセンジヤホーイを以て御届申上ぐべく半衿一掛等城壁市たりとも御遠慮なく御用命下さる様希ひ上ぐ奉る

地方の御方様
御来八の物は是非御主寄被成下度候
流行新柄品は申上ぐる迄も無く贅沢品高貴品又日用なくては叶はぬ実用品に至るまで御意に適ふ様丹誠致し可申候

八戸十三日町
三萬呉服店

終